<論　説>

1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態(3)

西南フランスについて

(下)　1848年革命とドイツ人

的　場　昭　弘

(下) の目次

a) 1848年3月革命とドイツ人の帰還
1) 1848年2月革命とパリのドイツ人
2) フランスのドイツ人軍団
3) スイスのドイツ人
4) フランス，スイスのドイツ人の進軍と敗北
b) ドイツ人亡命者
1) スイスへの亡命
2) スイスからフランス経由でイギリス，アメリカへ
3) フランス通過の状態
c) 西南フランスのドイツ人
1) 西南フランスのドイツ人
2) パリからノルマンディー，ブルターニュへ
3) パリ，リヨンからボルドーへ
4) パリ，リヨンからマルセーユ，アルジェリアへ
小　括

a)　1848年3月革命とドイツ人の帰還

1)　1848年2月革命とパリのドイツ人

i)　革命とフランスのドイツ人

1840年代にフランスへやって来たドイツ人には，さまざまな種類があった。定期的に遍歴する職人，職を求める労働者，旅行者，外交官，実業家，アメリ

カへ向かう移民そして政治亡命者である。1848年2月革命とそれにつづくドイツでの革命は，フランスにいる多くのドイツ人，とりわけ政治亡命者を勇気づけ，彼らを帰還させることになる。1851年の統計で見るとわかるように（以下1851年の人口調査に関しては［B, 42, p. 99］を参照），革命を境にしてフランスにおけるドイツ人人口は大幅に減少する。特にパリのあるセーヌ県ではドイツ人人口は10000人代に減少する。1848年のパリ市の外国人の出発ヴィザの発行状況を見ると，1月はほぼ30—40人代であったのが，3月になると200人代になり，4月には300人代に増えている［A, 1, a］。減少の原因は，革命の影響であるが，この影響はそれほど単純ではない。

まず，革命の勃発によって，パリで「ドイツ人軍団」(Deutsche Legion) が組織され，それが数千名のドイツ人を吸収し，一路ストラスブールへ向かい，リヨン，マルセーユなど各地から集まった同様の軍団と合流し，4月のヘッカー(Hecker, F) (1811-81) の共和国に参加するためバーデンへ進軍する。しかし，失敗しスイス，フランスへ撤退する。この時点で，ブザンソンやストラスブールなどを中心としたドイツ人コロニーが形成される。9月にはシュトルーヴェによる蜂起が起き，それに参戦するも，再び撃退されフランス，スイスへ撤退する。そして，1849年5月から7月のバーデン蜂起で最後の参戦をし，結局フランス，スイスへ撤退することになる。しかしその時，フランスはすでにこうしたドイツ人の受け入れが可能でない政治的変化を蒙っており，多くの受け入れを拒否する。したがってスイスへ1万人以上のドイツ人が流れ込むことになる。スイスも，政治的不安を抱えることを嫌い，イギリスやアメリカへ亡命者を輸送することを考える。その際，フランス経由でイギリス，アメリカへというコースをフランス政府が受け入れたため，多くのドイツ人亡命者がフランスを通過することになる。1849年7月から1853年までこうした流れは続く。

また一方でフランスへ逃れてきた亡命者たちは，国境沿いの都市やパリ周辺から，西南フランスへ移動を命じられ，フランスへ残る決意をしたものは，パリより西，南の地域へと移動することになる。こうした地域は，革命前ドイツ人があまり居住していなかった地域である。こうした人々の中には，さらにマ

ルセーユ，ツーロン経由でアルジェリアへ赴き，そこで庸兵として再度軍へ入るものもいた。

革命後のドイツ人は，こうしてフランスでの外国人人口の主流ではなくなる。もちろん革命後のドイツでは，亡命者だけでなく一般のドイツ人も多く故郷を去る状況がでてくるが，彼らは政治的に移入制限を厳しくしたフランスではなく，アメリカへと進むことになる。(1)

ii) ドイツ人軍団

1848年2月24日にパリで革命が起きると，ドイツ人亡命者はすばやくそれに反応した。パリにいたドイツ人職人や知識人を中心とする多くの秘密結社ばかりでなく，ロンドンやブリュッセルの，シャッパーを中心とする共産主義者同盟もいち早く反応を見せ，本部をロンドンから，ブリュッセル，パリへと移し，ロンドンやブリュッセルからパリへマルクスなどの政治亡命者が集結する([B, 46] 参照)。パリで3月始めに論議された問題は，二つの政策であった。それは基本的には，すでにドイツへ波及しつつあるフランスの2月革命を，ドイツへどういう形で伝えるかという問題で，一つは，革命の暴力的輸出といった政策，もう一つは，ドイツの状況の中で革命を見すえていこうという政策であった。前者は，ヘルヴェークを中心とするパリ在住組で組織した「ドイツ人民主協会」(L'Association démocratique des allemands) で，後者は，共産主義者同盟を中心とするドイツ人労働者クラブであった。民主協会は3月6日に設立され，ポーランド人と組んで武装してドイツへ乗り込み，ポーランドを含めた解放を企図していた。ヘルヴェークは「当地のドイツ人は，自らを組織し，武装し始め，短期のうちに4000―5000人の軍団ができる可能性があります」[B, 34, S. 56] と述べていて，武装路線を主張していた。ヘルヴェークには，さらにパリ，ブリュッセルとマルクスと常に一緒にいた人物ボルンシュテットが加わっていた。マルクスは「ボルンシュテットとヘルヴェークはごろつきのようなことをしている」[MEW. Bd. 27, S. 119] と彼らの行動を厳しく非難する。ヘルヴェークは，民主協会のポスターで「われわれは2月の崇高な闘争に対する，貴方がたの勇気と愛国心の証人でありまして，貴方がたの英雄的先例を学び，

貴方がたの連盟国，兄弟国ドイツ共和国を宣言するためにドイツへ行きたいと思っております」[A, 9] と書き，そのために武器が必要で，すでに使いふるした武器を貸して欲しいと訴える。サントノレ通りで開かれた民主協会とサン・ドニ通りで開かれたドイツ人クラブはまったく政策を異にする集団となり，パリのドイツ人たちを分断することになる。マルクスの妻イェニーは，この二つのクラブにマルクスが関係していないことを知らせるために『ヴェストフェーリッシェ・ダンフボート』(*Das Westphaelische Dampfboot*) に記事を書く [B, 34, S. 63]。

シャパーやマルクスの戦略にもかかわらず，パリのドイツ人たちを集めたのは武装派勢力であった。民主協会の中心にいたコルヴィン (Corvin, O) (1812–86) は「ほぼ5000人からなり，多くのポーランド人も含まれている。われわれの目的は，ドイツに戻っていたるところで武器の力をはかりにかけ，選帝侯に対する蜂起を優柔不断なく行い，最後にドイツ共和国を作りあげることである」[B, 28, Jg. 12, S. 399] と述べているが，軍団の勢力5000人（当時のパリのドイツ人人口のかなりの部分）は，圧倒的な組織力であった。彼らは，フランス政府の口減らしも手伝って，軍団を従えてストラスブールに到着する。

当時のフランス政府，特に山岳派のルドリュ・ロランは，革命の波及を促進しようと考えていたため，ストラスブールで彼らは，援助を受けることができた [B, 28, Jg. 12, S. 390]。ドイツ人軍団は，当初よりかなり人数を減らし(2)，ヘッカーのドイツ共和国を支援すべく，進路を南にとり，上ライン県のミュルーズの近くのライン河沿いのケンブス (Kembs) で河を渡り，ドーゼンバッハへ向かう。

1848年4月12日ヘッカーは，スイスから国境のコンスタンツに入り，ドイツ共和国を宣言する。ヘッカーの手勢は，スイスにいたドイツ人であったが，1845年以降のドイツ人の活動は押さえられていたため，数は少なかった。3月26日にバーゼルの近くのノイバード (Neubad) で600人のドイツ人が集まり，ベッカー (Becker, Ph.) (1809–86) を中心とした軍団を組織していた [B, 29, S. 4] が，彼らの数もスイスにいる数万人のドイツ人からするとわずかで，結局数百

人の義勇軍を組織し，正規の軍隊数万人に立ち向かった。第一次バーデン蜂起がこれで，ヘッカーはコンスタンツからバイエルン軍，ヴュルテンベルク軍に追い詰められ4月20日にカンデルン（Kandern）へ進む。そこでヘッセン・バーデン軍に最終的な敗北をきっしたヘッカー軍は，スイス，フランスへと亡命する。その中には，ヴィリッヒ（Willich, A.）(1810–78）とシュトルーヴェが含まれており，シュトルーヴェはストラスブール，ヴィリッヒはブザンソンへ行く。その数日後，ヘッカー軍を援護しようと考えたドイツ人軍団が国境を越える。ドーゼンバッハ（Dosenbach）の戦いで，彼らもまた敗北し，4月24日再びフランスへと撤退せざるをえなくなる。

こうしてドイツ人軍団は，結局革命の輸出に失敗し，フランスで状況の変化を待つことになる。彼らの最初の武装蜂起は失敗に帰したのであるが，こうしてドイツ国境近くのフランス地域に武器をもったドイツ人が居住する状態が生まれることになるのである。

2) フランスのドイツ人軍団

i) ブザンソンのドイツ人

敗北したヘッカー軍の何人かは，南下しブザンソンに落ち着く。ブザンソンは，1830年代にポーランド人の収容所があり，スイスへの進軍，サヴォアへの進軍の原因をつくった町であったが［B, 43, p. 25f］［B, 44, pp. 7–10]，1848年革命においては，再度バーデン蜂起の原因の一つをつくる町になる。ブザンソンは，ドゥーブ川が町をお堀のように取り囲み，背後に要塞のある町全体が要塞都市のような町である。この地から，フーリエ，コンシデラン，プルードン，ユゴーなどの人物がでているが，フランシュ・コンテの伝統を残す，独立心旺盛な町である。ブザンソンにドイツ人亡命者が現れるのは5月4，5日である。バーゼル近くの町ユナング（Huningue）から120人のドイツ人がやってきたが，その後500人がこのブザンソンへ居住することになる［B, 42, p. 115］。

このコロニーでもっとも重要な人物は，ヴィリッヒである。彼は3月にケルンでアネケ（Anneke, F.）(1818–70)，ゴットシャルク（Gottschalk, A.）(1815–49)

とともに逮捕され，ヘッカー軍に合流した。彼はブザンソンのコロニーで鉄の規律を貫く。コロニーのドイツ人たちの規律はしっかりしており，町でコンサートを開いたり，評判は悪くなかった［B, 35, p. 13］。しかし，一都市に集中させないフランス政府の方針で，6月までには人口は100人代に減少する。ヴィリッヒのスイスのベッカー宛の手紙を見ると，ブザンソンのドイツ人は320人で，ポンタルリエ，サン・イポリット，オルナンに142人がいることになっていて［A,7］(3)，あいかわらず一定の人数が確保されていることがわかる。アムステルダムのヴィリッヒのアルシーヴには，当時のコロニーのリストが保存されているが，全部で262名登録されている中で，ヴィリッヒの名が筆頭にあり，その職業は司令官となっていて，彼がいかにこの中で重要視されていたかがわかる(4)。

やがて9月になるとシュトルーヴェのレルラッハ（Loerrach）での共和国宣言の話がブザンソンに伝わる。フランス政府は，彼らがドイツへ出発することを喜んでいたし，ヴィリッヒもブサンソンの人々に礼を言い，バーデンへ向けて出発する。ところが，シュトルーヴェの蜂起は短命に終わり，シュタウフェン（Staufen）で彼自身逮捕されてしまう［B, 29, S. 18］。ヴィリッヒはすでに国境を越え，ミュールハイム（Muhlheim）へ進むが，結局ユナングで撤退する。こうして再度共和国の夢破れたヴィリッヒの一団はフランスへ戻り，結局は約260人が再度ブザンソンに収容されることになるのである。彼らの名簿を見ると，46人が仕立て職人，23人が家具職人，22人が靴職人で，ほぼ主要な職種はパリのドイツ人職人の職種であることにきずく［A, 7］。ヴィリッヒは，リヨンでイタリアとの連合を組もうとしてそこで逮捕され，スイスへ追放されることになる。

ii）ストラスブールのドイツ人

ヘッカーの蜂起の後，ストラスブールに向かったメンバーにシュトルーヴェがいた。シュトルーヴェは回想録の中で「25日バーデンを去らねばならなくなった時，私はすぐにもういちど新しく集めた力で祖国に戻り，シュヴァルツヴァルトの山で自由闘争を行うことが可能であろうと期待していた」［B, 39, S. 96］と述べていて，彼のストラスブールでの生活はまさに第二の蜂起に当てら

れることになる。(5)

アルザスのドイツ人亡命者にとって重要なことは，アルザスの急進派，具体的にはストラスブールとコルマールの「共和協会」(Société republicaine) との関係である。ストラスブールでは，共和協会の協力のもとで「ドイツ共和主義者中央委員会」(Zentralkomitee der deutschen Republikaner) が結成されることになる [B, 28, Jg. 12, S. 393]。コルマールの共和協会は「共和制の実現，自由，平等，博愛の実現，人民のための政府の実現，市民教育の完備」を主要理念としていた [B, 25, p. 72]。マイヤー (Meyer, Ch. F.) (1809–?)，モスマン (Mosssmann, X) (1821–93)，ジェンガー (Jaenger, P.) (1803–?) がその中心人物であったが，彼らとドイツ人サヴォーエとは親しい関係にあった。彼らはポーランド人亡命者の援助に乗り出すが，その中心はヘルヴェークを中心とするドイツ人軍団であった [B, 25, p. 89]。しかし，こうした関係は関係として，ドイツ人コロニーの状態はフランスにおける政治変化，特にパリの六月蜂起以後の微妙な政治変化に左右されることになる。たとえば6月蜂起でフランスの急進派ばかりかエヴァーヴェク，ブリント (1826–1907) まで逮捕され [[B, 28, Jg. 12, S. 419]，フランスの急進派とドイツ人との関係が問題になった。フランス人の亡命者はサヴォア，ジュネーヴへ亡命して [B, 18,S. 191] いったが，ジュネーヴには，ドイツ人の亡命者やイタリア人の亡命者がいて，彼らと結ぶ国際的革命組織へ，権力を握りつつあったカヴェニャック将軍達は不安をつのらせていく。しかし，問題がこじれるのは，急進派がパリでも，またストラスブールでも敗退する1849年からである。

シュトルーヴェ，レーベンフェルス (Loewenfels)，ブルーン (Bruhn, K.) (1803–?) たちが，ストラスブールからフランス内部の地域への移動を命ぜられたのは5月始めのことであった。シュトルーヴェの中央委員会の落ち着き先は，西へ200ｋｍ離れたシャロン・シュル・マルヌであった。1848年5月の統計ではシャロンに185名のドイツ人がいることになっているが [B, 42, p. 113]，ストラスブールの当時の人口状態を見ると，そのことがよりはっきりとする。5月3日には78人のドイツ人がストラスブールからシャロンへ向けて出発していて，

ブザンソンへも5月3日76人，4日43人，ヴズールへも5月3日16人，4日28人のドイツ人（ヴズルでは，5月に46人のドイツ人が登録されている [A, 3, v, i] が)，トロワへも5月3日52人と大量のドイツ人が移動しているのである [A, 3, u, i]。シャロンのドイツ人たちは厳しい監視下にあった。シャロンでのシュトルーヴェに関しては，いくつかの資料が残っている [A, 3, m]。それによるとシュトルーヴェはドイツ臨時政府のメンバーでミュンヘン生まれ42歳，既婚，170cm，髪の色ブラウンであり，職業はマンハイムの『ドイツの観客者たち』(*Deutschen Zuschauer*) の元編集者となっている。彼は，ストラスブールかパリに居住させてくれるよう頼むが，受け入れられてはいない。むしろ政府が彼らに申し出た居住地は南フランスであった。結局，シュトルーヴェ，レーヴェンフェルス，ブルン，ブリントたちはこの地に居住することになる。そこでの彼らの生活はけっして楽ではなく，9月のシュトルーヴェがバーデン第二次蜂起に出発する直前の12日の資料には，600フランの負債を抱えていることが書かれてある。彼らは宿代，食事代をホテルから請求され，それを信用で支払おうとしたが，当局とひともめ起こしている。出発する前に精算したかどうかは不明である [A, 3, m]。

シュトルーヴェは，1848年9月20日バーデンから近くのレルラッハへ入り，そこで共和国の宣言をする。そこに参加したレーベンフェルス，ブルンなど多くはストラスブール，シャロンと一緒だったものたちであった。しかしほぼ4000人の共和国軍は，わずか5日で政府軍に敗北し，シュトルーヴェは逮捕されてしまう。この蜂起では，ヴィリヒ率いる軍団と敗残したシュトルーヴェ軍団が再度スイス，フランスへ亡命することになる。

3）スイスのドイツ人

スイスにおけるドイツ人の活動も，バーデン蜂起によって重要な要素となっている。ビール，チューリッヒ，ベルンなどを中心としてドイツ人の活動は続けられていた。スイス国境に近いバーデンでのヘッカーの蜂起，シュトルーヴェの蜂起は，スイスと深く関わっていた。ベッカーはビール，ヘッカーはム

テンツ (Muttenz) におり，シュトルーヴェ，ハインツェンもシャロンを去って，バーゼル近くのビルスフェルト (Birsfeld) で「ドイツ共和制と革命化のプラン」を練って，バーデンに侵入していた [B, 29, S. 16]。スイスでは，ドイツ人亡命者は，比較的民衆の支持を得ていた。バーデン政府は，フランス政府に対してドイツ人亡命者を，バーデン国境地域のアルザスからフランスの内部へ移動させたのと同じ主旨の要求をスイスにも要求してくる。多くのドイツ人亡命者は，ムテンツを中心とするドイツとの国境地域にいたからである。ドイツ人亡命者の引渡しをスイスは拒否したばかりか，国境近くの町からドイツ人を移動させることも拒否する [B, 29, S. 19]。

9月のシュトルーヴェの蜂起後，スイス大使となったフランクフルト議会からの大使フランツ・ラヴォー (Ravaux, F.) (1810–51) は，このドイツ人亡命者の追放の役目を負うことになる。しかし，ラヴォーは共和制の信奉者で，彼がドイツ人亡命者たちの共和運動を嫌悪していたとも思えない。ラヴォーはスイス政府に迫るが，どれほど積極的だったかは疑問である。ベルン政府は，シュトルーヴェがバーゼルから出発したのは事実であるが，彼らは武器を持たずに国境を越したわけであり，スイス政府が武器を支援したわけではないと答え，結局それで引き下がり，ドイツ人亡命者の滞在はその後も認められることになる。実は，このことは1849年の第三蜂起を考える上では大きな事であった。その理由は，ドイツ人亡命者が再び，バーデンの第三の最大の蜂起（バーデン革命）に参加するための礎石となっているからである。皮肉にも，ラヴォーは1849年の蜂起側にまわり，彼自身スイスへ亡命してくる。しかし，そのときはスイスへの圧力が強く，亡命者は国外追放となってしまうのである [B, 12, S. 187]。カールス・ルーエにあるストラスブールに追放されたリストの筆頭に彼の名を見ることができる(6)。

スイスにおけるドイツ人亡命者の中心は，「スイスドイツ人中央委員会」のフィリップ・ベッカーであった。彼は，ビールで過激な印刷物を印刷したり，謀議活動を行ったという理由で，裁判所に何回か呼び出されていた。おもに，「庇護権」の乱用がその中心であった。1849年にベッカーは6ヶ月の追放を受

けるが，結局その実行はされなかった [B, 29, S. 43]。第三次バーデン蜂起に参加したエンゲルスは，ベッカーを非常に高く評価し，唯一のドイツ革命の将軍であると言っているが [MEW, Bd, 21, S. 324]，ベッカーのスイスからの参加はバーデン蜂起に大きな貢献をしている [B, 5]。

4) フランス，スイスのドイツ人の進軍と敗北

バーデン蜂起に際して，外国にいるドイツ人たちは5月にスイス国境のエフリンゲン (Effringen)，そしてレルラッハに集合をかけられた。ベッカーを中心とする義勇軍は，こうして北へ上り，敵の大軍と戦闘を交えることになる。

バーデン蜂起についてエンゲルスはみずから，参加したためか，参加したにもかかわらずか，バーデン蜂起をプチブル的革命だと評価している。エンゲルスが高く評価するのは，むしろ北の工業の発達したラインのエルバーフェルト (Elberfeld) に起こった蜂起であり，職人を中心とした小生産者の立場での蜂起であるとされるドレスデンでの蜂起や西南ドイツのプチブルを中心とした蜂起も，このエンゲルス説からすると，非常に低く評価されているものである [B, 6, SS. 111-132]。48年革命の当初から，ドイツ軍団と袂を分かち，ケルン地域での民主運動を繰り広げたマルクス，エンゲルスとしては，宿敵ヘルヴェークやシュトルーヴェなどの共和制運動は，鼻持ちならなかったのであろうが，この説は，その後の48年革命に大きな影響力をもっている。しかし，現在ではバーデン蜂起の48年革命におけるその象徴的意味は，むしろエンゲルスの評価以上に高く評価されていると言えよう。(7)

バーデン蜂起は，憲法擁護の運動として展開するが，第一次，第二次蜂起からの共和制運動と，亡命者を中心とする軍団の展開がもたらした戦闘であったとも言える。カールスルーエの国王を追い出し，市民が権力を握ったバーデン蜂起は，短命に終ることになる。バーデン国王をカールスルーエから追い出した中心メンバーには，1848年9月の蜂起の失敗で刑務所にいたシュトルーヴェ，ブリントや，ヴィリッヒ，ハインツェン，ベッカーなどの亡命者が数多くいた。彼らを中心に，そのまわりに1万人近くのドイツ人の職人，学生，知識人，ス

イス人，フランス人，ポーランド人などの義勇軍がいた。バーデン軍，プファルツ軍，義勇軍は，クロイツナッハ（Kreuznach）方面，マンハイムからのプロイセン軍の攻撃に抵抗できず，徐々に退却し，最後にラーシュタット（Rastatt）の要塞に籠る軍団と，その付近に野営する軍団に分かれる。前者は要塞に最後まで籠城し，壮絶な戦いを行う。ラーシュタットに残った一団は最後は力尽き，降伏する。多くはラーシュタット要塞に収容されるが，何人かは処刑されることになる(8)。エンゲルスなどのラーシュタット要塞の外にいた軍団は，その後も敗退を続け，結局スイスへ，フランスへ亡命することになる。その数は1万を越えるほどであった。エンゲルスは，蜂起の失敗として，すぐにフランクフルトへかけ上り，戦線を有利に展開しなかったことをあげている［B, 6, S. 131］。鉄道を使えば2日でできたことだという。鉄道は，蜂起の大きな失敗の原因でもあった。前線までの輸送に鉄道を使った軍隊は急速に前線を拡大できたが，すこしでも休むと前線は逆に展開することになったからである。また，一方で，軍団の乱れも原因の一つであった。亡命者はいざしらず，知識人や学生，市民は，蜂起がこうした戦争状態になるものと思わなかったため，義勇軍，軍隊のなかからすこしずつ脱落していったからである。バーデン軍，プファルツ軍は，義勇軍にくらべて士気が上がらなかった。さらにフランスの支援が停滞したことも，失敗の理由であろう。

本来武器の輸出が期待される，フランスでおなじ6月に致命的な蜂起が起こっていた。1849年6月13日にその蜂起は起こった。ルドリュ・ロランと山岳派は，2月のローマ共和制に賛成し，法王の廃止に同意したが，ルイ・ナポレオンは法王の復活のためにローマへフランス軍を送る。これは，外国の主権を犯さないという憲法に違反しており，ルドリュ・ロランは憲法が破棄されたとして，抵抗を呼びかけた。しかし，この抵抗は敗北に終わり，フランスのバーデンへの支援の芽は断たれる。この運動は，フランス全体の山岳派の敗北を意味し，ストラスブールやコルマールでも多くの仲間が逮捕される。ストラスブールでは，バーデン蜂起を支援する組織が，6月に結成され，ストラスブールの対岸のケール（Kehl）へ義勇軍を送る予定であった［B, 28, Jg. 12, S. 416］。その

中心人物は山岳派のエミール・キュス (Emil Kuess) (1812-?) であった。しかしキュスは，6月14日の蜂起の関連でフランス共和制破壊に策謀者として仲間6人と逮捕される [B, 15, p. 196]。この結果，下ライン県のバーデン蜂起の後方支援の芽はつみとられる [B, 17, pp. 167-191]。同じように上ライン県でもバーデン蜂起を支援する組織がジェンガー，マイヤー，モスマンによって作られるが，6月14日の彼らの逮捕によってそれも断たれる [B, 24]。その頃，パリでもルドリュ・ロラン，フロコン，サヴォーエによってエヴァーベックのもとで支援委員会が作られる [B, 28, Jg. 12, S. 416]。この委員会は，ドイツ人，オーストリア人，ポーランド人の組織に関係し，亡命者組織は，バーデンのドイツ人だけでなくポーランド人，オーストリア人も支援しようとしていた。またバーデンから来たブリントとプファルツから来たシュッツ (Shuez) が大使として，フランスの援助を要求する努力をしていた [B, 28, Jg. 12, S. 417]。

こうして，後方の支援を完全に断たれたドイツ人たちは，バーデン蜂起に失敗しただけでなく，フランスへ亡命することも難しい状況となる。第一次，第二次のバーデン蜂起とちがって，フランスはこうしたドイツ人の流入を拒否することになる。フランス政府は，バーデン蜂起の動きを正確に摑んでいた。6月6日にはカールスルーエで起こった動きをキャッチし，その中心は，シュトルーヴェ，ベッカー，ラヴォーなどであることも情報として手にいれていた [A, 2] し，その後もストラスブールからの情報を集め，今後の対策の資料としている。

b) ドイツ人亡命者

1) スイスへの亡命

プロイセンは，バーデン蜂起の参加者を20000人と見積っているが [B, 33, S. 192]，そのうち約9000人がスイスへ亡命し，約4000人が逮捕されていた。しかし，実際には1万人をはるかに越すドイツ人がスイスへ亡命したとも言われ [B, 33, S, 216]，スイスの当時の人口250万人からいって，大変な難民をスイスは抱えることになる。難民の多くの職業は，商人，仕立て職人，学生，医者，靴

職人，農業労働者などであった。(9) すでに，南スイスには，イタリア人亡命者，ジュネーヴ地域にはフランス人亡命者を抱えていた。スイスに入った亡命者たちは，各地域の収容所に武装解除して収容され，さらに援助を受けることになる。この援助の額は，相当なものにのぼり，スイス政府は財政的にも破産の危機に瀕する。ベルン地区だけでも，1849年7月から1年間の間に，250人の残留者に60000フランを支出していた [B, 18, S. 388]。このためスイスは，こうした難民をスイス国内ですべて収容できないことを確認しており，アメリカ，イギリスへ移民させることを考える。スイス政府が考えた対策は主として2つであった。

もちろん第一の解決策は，蜂起のとがめなく故郷へ戻らせることである (1851年までにバーデンだけで4000名ちかくが戻っている。帰郷者は全体のほぼ8割にのぼっている。しかし，これが可能なのは，兵と下士官に限られていた)。プロイセンも多くの参加者の名簿を手にいれており，(10) 多くの亡命者は逮捕を覚悟しない限り，おいそれとは帰郷できない状況であった。庇護権によって引渡しを認めていないスイスは，逮捕される亡命者たちをプロイセンへ引き渡すことはできなかった。

第二の処置は主要な幹部（シュトルーヴェ，ミエロスラフスキー（Mieroslawski, L.）(1814–78)，ジーゲル（Sigel, F.）(1824–1902)，ヴィリッヒ，メッテルニヒ（Metternich, G.）(1811–82)，フィクラー（Fickler, J.）(1808–65)，ブレンターノ（Brentano, L.）(1813–91)，ゲグ（Goegg, A.）(1802–97）など約50名）の追放と，第三国行きを望むものをやっかいばらいすることであった [B, 18, S. 349]。(11) やっかいばらい先は，イギリスとアメリカしか考えられなかった。しかし，スイスは内陸の国であり，アメリカとイギリスへ行くには，フランスか，ベルギー，イタリアを通らざるをえない。そこで，スイス政府は，フランスに通過の許可を要求する。プロイセンにとっても，フランスにとってもこうした通過はマイナスではなかった。急進的な活動家の根を断つには，みずから輸送費を支払っても充分余りあるものであったからである。結局，ドイツ人の亡命者はフランスを通過するというコースが一般化し（もちろん，エンゲルスのようにイタリアからのコース

や，さらにギリシアからイギリス，アメリカへ渡るというコースもあった)，フランス人，イタリア人の亡命者に関してはドイツを通って，オランダ，ベルギーの港からアメリカ，イギリスへ行くというコースが一般化する。このコースは1830年代からイギリスに渡った亡命者のコース，またルアーヴル経由でアメリカへ渡る移民者のコース [B, 45] とほぼ同じであった。こうしたヨーロッパ，アメリカを結ぶ列強の革命家追放の協力は，1848年革命による混乱を収拾しようという列強諸国の思惑が一致したからであり，革命家たちにとっては，その後ほぼ永久にヨーロッパでの世界革命の可能性が消滅することになる。

スイスに亡命したドイツ人たちの人数については，ベルンの資料から類推できる。バーゼル市だけで1年間で5081人がやって来ていた (表1)。参加した国別の人数をみるとわかるように圧倒的にバイエルン（ライン・バイエルンだと思われる)，バーデン，ヘッセンで，これだけで8割以上を占めている。しかし，ドイツ各地から参加者がいるし，フランス，スイス，ポーランドからの参加者もいる。多くはスイスの政策もあって1年のうちに帰郷するが，スイスへその後も残存するもの775人，アメリカへ行くもの308人となっている。要するにもっとも重要な人物は，このうちの約6％のアメリカへ追放された人々である。

5000人の亡命者がどのように入ってきたかについては，月別の入国数を調べるしかない。バーセルの警察によって確認された人数は，1849年7月4日から始まっている。残念ながら7月の資料しかないが，7月4日から19日までの15日で500人以上のドイツ人がバーゼルへやってきていることがわかる (表2)。その他の国境ラインフェルデン (Rheinfelden)，シュタイン (Stein)，ラウフェンブルク (Laufenburg)，カイザーシュトゥール (Kaiserstuhl)，ツアツァッハ (Zurzach) も考慮すると，その数は一月で3000人にものぼっている。その他の地域を越すものの数を推察すると，短期間の間にいかに多くのドイツ人がスイスに亡命してきたかがわかる。バーゼルに入ったドイツ人たちの多くは，ベルン，チューリヒ，ソロトゥルンなどスイスの主要都市に向かうが，中には，フランスへ向かうものもいた。また，すぐに故郷へ帰るものも何人かはいた。全体と

表1　1849年7月4日から1850年7月20日までの間，バーゼル市にやってきて，スイスに滞在した人々，また再度亡命した人々の国別人数と，亡命先。[A, 6, c] [B, 33, S. 246]

国	亡命国	全体の数
ロシア	スイス4人，帰郷2人	6人
オーストリア	スイス40人，アメリカ13人，イギリス6人，オランダ1人，フランス1人，帰郷6人，不明1人	68人
プロイセン	スイス57人，アメリカ29人，イギリス4人，フランス3人，帰郷57人，不明1人	151人
サルディニア	帰郷2人	2人
オランダ	帰郷1人	1人
ベルギー	スイス1人，帰郷3人	4人
ハノーファー	スイス9人，アメリカ1人，オランダ1人，帰郷9人	20人
ザクセン	スイス21人，アメリカ14人，オランダ2人，帰郷21人	58人
バイエルン	スイス170人，アメリカ55人，イギリス5人，フランス13人，帰郷1089人，不明5人	1337人
ヴュルテンベルク	スイス67人，アメリカ12人，イギリス2人，オランダ1人，フランス4人，帰郷31人，不明3人	120人
バーデン	スイス196人，アメリカ172人，イギリス13人，オランダ1人，スペイン1人，フランス17人，ハンブルク2人，帰郷1920人，不明32人	2354人
ヘッセン大公国	スイス52人，アメリカ8人，帰郷530人，不明2人	592人
ヘッセン侯国	スイス121人，アメリカ1人，オランダ1人，帰郷65人	188人
メクレンブルク・シュヴェリン	スイス1人，アメリカ1人，帰郷3人	5人
シュレズヴィッヒ・ホルシュテイン	スイス2人，帰郷2人	4人
ハンブルク	スイス3人，イギリス1人，帰郷1人	5人
フランクフルト	スイス3人，アメリカ2人，フランス2人，帰郷2人	9人
その他のドイツ	スイス19人，帰郷47人，不明1人	67人
イタリア	スイス9人，イギリス2人，ベルギー3人	14人
フランス	イギリス6人，オランダ2人，帰郷7人	15人
北アメリカ	帰郷2人	2人
スイス	帰郷59人	59人
全体	スイス775人，アメリカ308人，イギリス39人，オランダ9人，ベルギー3人，スペイン1人，フランス40人，ハンブルク2人，帰郷3859人，不明45人	5081人

して見ると，彼らはスイスへとりあえず亡命の地を求める以外に手がなかったといえよう。また彼らの職業を見ると，多くは職人，学生，知識人，商人などである。特に，靴職人，仕立て職人，家具職人が多いが（1850年5月14日の統計では，仕立て職人20／58，靴職人14／58，家具職人7／58で圧倒的である，また1850年3月22日の統計でも仕立て職人92／265，靴職人61／265，家具職人22／265でかなりの数を占めている［A, 5, d］），これはフランス，スイスからのドイツ人職人が義勇軍として参加していたからであろう。(12)

2）スイスからフランス経由でイギリス，アメリカへ

スイスに亡命したドイツ人たちはすぐに再度，アメリカ，イギリスへの亡命を余儀なくされた。スイスから再度亡命したものについては，スイスばかりでなく，カールスルーエ，ポツダム，ブリュッセルなどに史料が残されている。(13)これを使って，バーデン蜂起に参加したドイツ人の実体を摑むことにする。

表2　バーゼルのスイス警察によって登録された亡命者の人数［A, 6, c］

日付け	人数
7月4日	15人
5日	72人
6日	15人
7日	30人
8日	19人
9日	40人
10日	46人
11日	16人
12日	18人
13日	14人
14日	25人
15日	6人
16日	20人
17日	153人
18日	47人
19日	24人

表3　ルアーヴルで乗船した亡命者の人数［A, 6, a］

報告回数	日付	人数
1回	1849年9月3日—10月1日	26人
2回	9月22日—29日	54人
3回	10月19日—11月1日	39人
4回	11月21日—12月10日	24人
5回	9月14日—1月3日	32人
6回	1850年1月9日—2月21日	37人
7回	2月28日—3月11日	31人
8回	3月19日—30日	84人
9回	3月30日—4月19日	141人
10回	4月20日—30日	52人
11回	5月1日—19日	75人
12回	5月19日—6月9日	84人
13回	6月9日—6月19日	82人
14回	6月23日—7月7日	84人
15回	7月8日—8月10日	80人
16回	8月10日—10月16日	80人

i) ルアーヴルからアメリカへ

ルアーヴルへの移動が行われ始めたのは，1849年の9月からである。ルアーヴルにあるスイス領事館では，スイスからフランスに入ったドイツ人亡命者が，無事にルアーヴルから船出したかをチェックしている（表3)。それによると，重要人物の出港の日がわかる。9月3日ハインツェン，ゲグ（イギリス)，ジーゲル（ニューヨーク)，10月1日メルゼイ（Mersey, A.)（ニューヨーク)，9月25日メッテルニヒ（ニューヨーク)，10月8日シュトルーヴェ夫妻（イギリス，サザンプトン経由)，10月8日ヴィリッヒ（サザンプトン経由)，9月22日ドル（Doll)（ニューオリンズへ)，10月8日アネケ（ニューヨーク)，10月29日ブレンターノ（ニューヨーク)。彼らが乗った船もそこには書かれている [A, 6, a]。主要人物は，ほぼ9月から10月にかけてルアーヴルを出港しているが，全体としてどれくらいの人物が，こうした道を通ったのであろうか。表3を見るとわかるように，領事館からの報告では，ほぼ一年間の乗船数が記録されているが，これによると約900人がルアーヴルから出国していることがわかる。これが正確であるかどうかは，ニューヨークに残っている名簿との対照が必要であろう(14)。彼らの行く先であるが，ほとんどがニューヨーク，ニューオリンズ，イギリスである。彼らの職業は，知識人よりも職人が多いことがわかる。特に多いのがパリのドイツ人職人の代表であった仕立て職人，靴職人であり，家具職人の方は意外と少ない。その他では，軍人（これは当然であろう)，パン職人，石切り職人，錠前職人，学生なども多い。また農業労働者や商人などもかなりいた。バーデン蜂起に参加し，スイスへ亡命したものの中で，アメリカへ渡ったものの多くが職人であることは，バーデン蜂起の積極的参加者を特徴づけているとも言える。その中の多くがスイス，フランスにいたドイツ人職人である可能性の高さも加味すれば，バーデン蜂起それ自体は別として，積極的な参加者は，外国から駆けつけた職人たちであり，彼らの軍事行動抜きにしては，蜂起の展開はありえなかったわけである。

スイスからルアーヴルまでの日数であるが，1850年1月18日 [A, 6, c] にルアーヴルに向かってスイスを離れたシュラム・ヤコブ（Schram, J.）は，1月26

日［A, 6, a］にニューヨーク行きの船に乗船していて，少なくとも1週間以内で着いている。2月13日に出発したアルベルト・カール（Karl Albert）は19日に乗船している。チッフ（Zipf, J.）は，3月1日［A, 6, c］に出発して5日に乗船している。おそらくすでに鉄道を利用していたものと考えられる［A, 6, a］。したがって，彼らの護送は，1830年代と違って，きわめてスムーズになされたように思われる。

ii）ベルギー，イギリス，アメリカ

イギリスへ渡ったドイツ人亡命者は，すべてルアーヴルを通ったわけではない。イギリスへ行く場合は，1834年のドイツ人が通ったようにカレーやブローニュ経由もあったからである。1849年8月26日，その二日前パリを去ったマルクスはブローニュからロンドンに向けて船に乗る。彼は，イギリス経由でニューヨークに向かうと乗船名簿に書いている［A, 4, b］が，実際には行かずロンドンに落ち着くことになる。マルクスのように，スイスからではなく，パリからロンドンへ渡るものはこうしたコースを取ったものと思われる。しかし，この乗船名簿にはシュトルーヴェなどの名はない。

また，フランスからベルギーへ出るコースもあった。1849年7月23日のベルギーの法務省の手紙にはバーデン政府が，「ブレンターノ，ゲグ，ミエロスラフスキー，ジーゲル，シュトルーヴェ，ヴィリッヒ，メッテルニヒ，ベッカー」など16人の重要人物がブリュッセルを通った場合には逮捕するように要求していることを告げている［A, 8］。しかし，実際にはベルギーには現れずに，ルアーヴル経由でアメリカ，イギリスに行っている。このことは，ベルンのベルギー大使館も1850年4月に調査し，フランスにいるバーデン蜂起の首謀者ミエロスラフスキー以外は，シュトルーヴェ，ブレンターノ，ゲグ，ジーゲル，ドル，ヴィリッヒ，メッテルニヒ，ハインツェン，レーヴェンフェルス等はすべて出港したことを確認している。ベルギーへの移動の確率は，けっして低かったわけではなかった。ベルギーは法的に初めて亡命者の引渡しを拒む法律を制定した国であった［B, 33, S. 210］。革命後2400人の亡命者がベルギーに逃れたが，その多くはフランス人であった。しかし，ベルギー政府のドイツとの関

表4　1858年6月15日のミュンヘンでのプロトコール，ベルギー，イギリス，スイス，ヨーロッパ外国におけるドイツ人亡命者のリストから著名な人物のリストアップ [A, 5, b]

国	亡命者の数	主要人物	居住都市
ベルギー	17人	カール・グリュン	ブリュッセル
イギリス	33人	カール・ブリント	ロンドン
		エルンスト・ドロンケ	グラスゴー
		フリードリヒ・エンゲルス	ロンドン
		フェルディナント・フライリヒラート	ロンドン
		ペーター・イマント	マンチェスター
		ゴットフリート・キンケル	ロンドン
		カール・マルクス	ロンドン
		アーノルト・ルーゲ	ロンドン
		ヨハネス・ロンゲ	ロンドン
		フランツ・ジーゲル	ロンドン
		カール・シャパー	ロンドン
		ヴィリッヒ	ロンドン
スイス	53人	フイリップ・ベッカー	ジュネーヴ/ビール
		シュテファン・ボルン	チューリッヒ
		カール・デスター	チューリッヒ
		ゲオルク・ファイン	チューリッヒ
		ゲオルク・ヘルヴェーク	チューリッヒ
アメリカ	84人	ブレンターノ	ニューヨーク
		フリードリヒ・ヘッカー	イリノイ
		ハロー・ハリンク	リオ・デ・ジャネイロ
		カール・ハインツェン	ニューヨーク
		グスタヴ・シュトルーヴェ	ニューヨーク
		ヴィルヘルム・ヴァイトリンク	ニューヨーク

係の良さ [B, 47] を嫌って，多くのドイツ人はベルギーを避けたとも言える。しかし，表4を見る限りベルギーにも亡命者が来ていることはわかる。ベルギーからイギリスへはオーステンデが一般的なコースであるが，オーステンデには渡航記録が存在しない。(15)

ヨーロッパでもっとも多くのドイツ人亡命者を受け入れた国は，イギリスであった。すでにイギリスの地には，スイス経由で多くのドイツ人が1830年代に亡命していた。しかし，名実ともにヨーロッパ最大のドイツ人亡命者の国にな

るのは，やはり1849年以降の事である。イギリスは，亡命者を拒否しないが，好遇もしなかった。1852年の3月には1970人の亡命者がいたが，そのうち半分以上の1150人がドイツ人であった [B, 33, S. 261]。しかし，イギリスで経済的に困窮したドイツ人がさらにアメリカへと旅だっていくことになる。特にバーデン蜂起の英雄たちは，イギリスよりもアメリカへと進んでいく。ロンドンで力を持っていたのは，ルーゲたちヨーロッパ民主協会と，キンケル，シャパー，ヴィリッヒであった。マルクスは，バーデン蜂起や，革命の華々しい動きから遠い存在であり，当時のドイツ人亡命者にとっては必ずしも重要な存在ではなかったと思われる。そのことは，キンケル，ルーゲ，シュトルーヴェなどへの辛辣で，皮肉な批判を見るとよくわかる [B, 27]。実際，マルクスの亡命は，革命への参加が原因ではなかったのである。1858年の史料 [A, 5, b] は，ロンドンに住んでいるドイツ人亡命者で著名な危険人物をあげていて，そこでの多くのドイツ人にはバーデン革命の参加者であるかどうかの備考がついているが，マルクスとエンゲルスに関しては「著名な共産主義者」(Bekannte Kommunist) となっているだけである (表4)。ただし，この史料は決して正確ではない。1858年に作られたものならば，すでにアメリカに行っている人物などはロンドンに滞在と書かれないであろう。この史料には罪状がついているが，マルクスなどの数名を除けば，革命の歴戦のつわものぞろいで，バーデン蜂起への参加，プファルツ蜂起への参加，ドレスデン蜂起の参加，ウィーン蜂起への参加が多い。その中でも内乱罪 (Hochverrat) が多く，死刑から懲役までの求刑を受けている。その他不敬罪 (Majestaetsbeleidigung)，税の支払い拒否 (Steuerverweiger)，出版法違反 (Pressvergehen) などの罪状がかかげられている。

もっとも多くのドイツ人亡命者を集めた国はアメリカである。1848年のアメリカへの亡命者をあつかったツッカー (Zucker) 編の本には48年革命者 (Forty-Eighters) の伝記の小辞典がついている [B, 41, pp. 261–357]。そこには4000人以上にのぼる亡命者のうち242人がリストアップされているが，かなり有名な人物が作為的に取り上げられている。これはアメリカに渡った亡命者の実態ではないと思われるが，いかに有名な革命家たちが，ヨーロッパを離れたかは一

目瞭然とわかる。アネケ夫妻，ベッカー，ベルナイス，ベルンシュタイン，ブレンターノ，コルヴィン，ファイン，フレーベル，ゲグ，ヘッカー，ハインツェン，クリーゲ（Kriege, H.）(1820–50)，シュルツ（Schurz, C.）(1829–1906)，ソルゲ（Sorge, F.）(1828–1906)，ジーゲル，シュトルーヴェ，ヴァイトリンク，ヴァイデマイヤー（Weydemeyer, J.）(1818–66)，ヴィリッヒなどの名を見ても，その状態がわかる。彼らのうちの多くは，たとえばジーゲル，シュルツ，ヴィリッヒ，ヘッカーはやがて1863年の南北戦争に参加する。

ルアーヴルへ行くドイツ人は，1851年3月の内務省の命令に従うと，すべてブザンソンを通過せねばならないことになっていた。「1. スイスから追放され，アメリカへ送られるドイツ人亡命者は，以下の場所でフランスにはいる。サン・ルイ（Saint-Louis）（バーゼル），ジューニュ（Jougne）—ポンタルリエ（ドゥーブ県），レ・ルス（Les Rousses）（ジュラ県）コロンジュ（Collonges）—ゲクス（アン県）。2. すべてはブザンソンに向かう。3. ブザンソンからディジョン，ディジョンからトヌール（Tonnerre），トヌールからパリ，ルアーヴル。ブザンソンでその後のコート・ドール県，ヨンヌ県，セーヌ・エ・ロワーズ県，パリ，下セーヌ県のヴィザは発行する」[A, 3, u, ii]。しかしブザンソンには，スイスよりフランス経由でルアーヴルへ行くドイツ人のリストが配布されたが，たいていはブザンソンを通ることはなかったという。リュデはリヨンの方を通ったのではないかと推察しているが [B, 35, p. 36]，ルアーヴルに到着しているスピードからして，実際にはこのコースを通ったとは思えない。鉄道を使ったものと思われる[(16)]。ただ，スイスのフランス大使館からの1850年4月3日の報告には，ブザンソンに向けてパスポートを取った4人の名があがっており，その中にリープクネヒトの名がある [A, 3, b]。このうちイギリスへ向かうとされた3人は4月13日にルアーヴルでアルカン（Harlequin）号に乗船していることがわかる [A, 6, a]。ジュネーヴから来た人々はブザンソンを通ったのかもしれない（リープクネヒトは，4月7日にポンタルリエ経由でブザンソンへ到着している。ブザンソンでは，1850年代末にはドイツ人亡命者の数は激減しており，また50年12月のロンドンでのヴィリッヒ等の革命的活動の影響による国境への危険性という配慮の下ナン

トへ向かっている [B, 35, p. 38])。

国境沿いという点で，もっともフランス政府が神経質になったのはアルザス地域であった。ラーシュタットにもっとも近いアグノー (Hagueneau) の町は，バーデン蜂起後にもっとも敏感に反応した町であった。ストラスブールには7月に350人のドイツ人亡命者が来ている [B, 28, Jg. 13, S. 373] (アルザス以外でもメスへは，フランクフルトから追放されたモンティグニー (Montigny, E.) が来ているし [A, 3, r]，ヴェルダンあたりにも数人のドイツ人が来ていた [A, 3, p])。スイスへ亡命したドイツ人のマインツ，ヴォルムスへの帰還の旅は，ストラスブール―アグノー―ヴィサンブール経由であったため，この監視を行っている [A, 3, n]。町では食料，交通費をそのために支出している [A, 4, c]。このコースを通ったドイツ人は1000人を越える数であった。ストラスブールも当然これに遭遇することになる。しかし，アグノーの史料では，バーゼル―ストラスブール間は鉄道で，なおかつストラスブールは通過するだけで市内に入れなかったようであり，市内における秩序は保たれていた。下ライン県で1849年6月21日から11月20日までにヴィザは，バーデン人114人，プロイセン人41人，ヴュルテンベルク人6人，バイエルン人134人となっている [A, 3, u, i]。またストラスブールは，スイスからアメリカへ渡るものが，ルアーヴルへ行く途中の都市でもあった。「県知事は，さる3月29日，スイスから来たかなり多くの亡命者，そのストラスブールへの到着はすでに告げられていましたが，彼らがミュルーズからパリへそのまま行くと言うことを知らせてくれました。この道順は，実際何人かにとって好むべきものでしょう」[A, 3, u. ii] という文書はそれを証明している。これによると，トヌールまではどのコースで来ても構わないが，そこからルアーヴルまでは，鉄道で確実に送り届けることを約束している。しかし，鉄道の路線図から考えてこの道順は理解しがたいのだが。1849年10月1日の報告では，ゲグ，ジーゲルはコルマールには来ておらず，メッテルニヒ，メルゼイ，ブレンターノはコルマールにいたとされている。したがって，後者に関してはストラスブールに上った可能性もある。しかし，シュトルーヴェはロン・ル・ソニエへ行き，ハインツェン，ヴィリッヒはブール・アン・ブレスに現れてい

るので，南を回った可能性が高い［A, 3, a］。

c）西南フランスのドイツ人

1）西南フランスのドイツ人

そもそも，ドイツ人を西南フランスへ追いやることになるのは，1849年7月7日に内務省から西南フランス地域に発せられた次のような命令にあった。「県知事へ。ドイツで起こっている事件はおそらく，その失敗の結果から免れるために起こるであろう多くの外国人亡命者を，わが国境にあふれさせるであろう。こうした状態から引き出される危険を避けるために，6月21日にモーゼル県，下ライン県，上ライン県の諸県に指示が出された。私は，フランスに現れるドイツ人たちをすぐに武装解除し，小集団に再組織し，以下の県への通行証をもって行かせることを勧めた。その県とは，カルヴァドス（Calvados）県（カーン地区を除く），コート・デュ・ノール県（Côtes du Nord），フィニステール（Finistère）県，イル・エ・ヴィレーヌ（Ille et Vilaine）県，ロワール・アトランティック県（Loire Altantique）（ナント地区を除く），メーヌ・エ・ロワール（Maine et Loire）県，マンシュ（Manche）県（シェルブール地区を除く），マエンヌ（Mayenne）県，モルビアン（Morbihan）県，オルヌ（Orne）県，ヴァンデー（Vendée）県，ヴィエンヌ（Vienne）県である」［A, 3, z, i］［A, 3, d］。これは，バーデン蜂起後，亡命してきたドイツ人たちを直接国境に接する地域から，西南地域へ移動させ［A, 4, e］，ドイツ人の陰謀を防ごうという考えにあった。こうした背景には，シュトルーヴェやハインツェンなどのフランスでの動きと6月のパリでの蜂起，さらにはアルザスでのその影響があった。内務省は，彼らの動きをアルザスとバーデンを結び付けるものとして警戒している（1849年6月29日内務省［A, 3, t, i］）。

1849年6月14日のジロンド県に出された内務省の手紙によると，「政治亡命者は，政府の強化がなければパリに行くことは認められない」［A, 3, h, i］と書かれており，地方だけでなく，パリへ行くことも困難になってくる。これは6月13日のパリでの事件を背景にしているわけであるが，すでにパリにいたものに

対しても厳しい処置が取られることになる。マルクスが7月19日パリから西フランスのモルビアン県ヴァンヌに移住することを勧められるのも，この関係である。マルクスは，自分は政治亡命者ではなく，正当なパスポートをもってパリに来たものであり，目的は政治経済学の完成であると主張している［B, 19, S. 75］。しかし，当時の状況の中で政治亡命者でないと証明することは容易ではなかった。8月16日にパリ退去を命ぜられ，前述のようにブローニュからロンドンへ行くことになる。

こうして，ドイツ人亡命者にとって，アルザス地域からは追い出され，パリからも締め出され，結局落ち着く先は，イギリス，アメリカ以外は西南フランスしかなくなってしまう。1851年の統計を見ると，あいかわらずパリにはドイツ人は13584人もいるが，しかし，1840年代に比べるとその数はかなり減少している。ドイツ人の人口はこうして1848年革命を境にして減少する。しかし，一方でドイツ人人口は西南フランスへと移動し，分散化も引き起こすこととなる。1837年にドイツ人の居住しなかった県も含めて，もはやドイツ人の居住しない県はなくなるという状態が生まれるのも革命後である。しかし，主要な革命家はフランスを去り，イギリス，アメリカへ移り，ドイツ労働運動史の中に占めるフランスのドイツ人の位置は減少することになる。

パリのドイツ人の最後を飾る問題としては，1851年の，パリの共産主義者の謀議の発覚である。この問題は，ケルンの共産主義者の蜂起の問題と関連づけられ，大きな問題へと発展して行く。この蜂起に関係して逮捕されたパリのシェルヴァル（Cherval, 本名 Craemer, J.），シェルツァー（Scherzer）などが，共産主義者同盟と関係していたため，ロンドンのヴィリッヒ，シャパー，マルクスをも巻き込むことになる。マルクスは，『ケルン共産党裁判の真相』［B, 26］というパンフレットを書き，共産主義同盟から分派した暴力革命主義のヴィリッヒ―シャパーとはまったく関係がなく，この陰謀自体もシャパー――ヴィリッヒ一派とプロイセンのでっち上げで，これはマルクスたちを陥れる手口であると主張する。確かに，暴力的革命路線から距離をおいていたマルクスが，この事件に関係あるとは思えないが，シャパー――ヴィリッヒが，プロイセンと組むこ

ともないと思われる。マルクスは，ロンドンにおける亡命者の中で劣性であるがゆえに，そうした印象を示すことで，ケルンの裁判を乗り切り，かつロンドンで優位にいたシャパー，ヴィリッヒ，キンケル，ルーゲを撃退するつもりであったのかもしれない。しかし，この事件はいずれにしろマルクスの名を有名にすることには役だったが，肝心の共産主義者同盟内での闘争の問題とは裏腹に，同盟自身壊滅的打撃を受け，ヨーロッパにおける組織を失うことになる。

マルクスは，パリの事件はライプチヒから始まると述べている [B, 26, S. 409]。5月ライプチヒでノートユンク (Nothjung, P.) (1821-80) が逮捕され，フリードリヒ4世の命を受けた秘密警察官シュティーバー (Stieber, W.) (1818-82)[17] がロンドンで共産主義者の資料を手にいれ，そこから8月パリのドイツ人の陰謀が発見されるという。パリでは，シュティーバーの画策で，シェルヴァル，ギバーリッヒ (Gibberlich, J.)，シェルツァーなどが逮捕されることになる。しかし，パリの事件については，ケルン共産党裁判に関するビッテルの詳細な史料集 [B, 2] を越えるほどの充分な史料調査はなされておらず，詳細はいまだ充分ではない。その理由は史料の不足にあるのであるが，パリのアルシーヴ・ナショナルには，法務省の資料がいくつか残っている [A, 1, d, e, f, g, h, j]。これによると，実はパリでシンメルフェニッヒ (Schimmelpfenig, A.) (1824-65) の家が家宅捜索され，ドイツ人の陰謀が発覚したのは1851年4月である (1852年2月6日付けの報告書)。これはプロイセンよりも早い。その後9月にパリのドイツ人共産主義者同盟のメンバーマテッセン (Mattesen)，カイザー (Kayser)，シェルツァー，ミューラー (Mueller)，シェルヴァルなどを逮捕するのであるが，ギペリッヒ，シェルヴァルは懲役8年の刑を受けながら，すぐに釈放されている。(マルクスが，ヴィリッヒも一枚噛んでいると言うのはまさにこの奇妙さの点である。) パリでの法務省の記録はケルンへ送られているし，この陰謀が事件としてパリで処理されているのも事実であるが，首謀者については，フランスからすぐに追放しているだけである [A, 1, c] (1852年6月11日付けの報告書)。これは，マルクスが考えていることと違って，ドイツ人亡命者をフランスからお払い箱にする政策の一貫かもしれない。なぜなら，シェルツァーは，2月28日に懲役3年

の刑を受けているが（計13人が逮捕され，10人が有罪，2人が8年，残りは3年［A, 1, h］），その記録を見るとドイツ人の共産主義結社は1850年暮れに出来上り，その長をし，ロンドンと密接な連絡を取っていたとなっている。しかし，シェルツァーは裁判で，自分はフランスの政治に一切関係したことはなく，ギバーリッヒとシェルヴァルの犠牲者であり，こうした陰謀と一切関係ないと主張する。だから，無罪放免して，アメリカかイギリスへ行かせてくれと要求している。確かに，早めに釈放されたシェルヴァルとギバーリッヒに比べて損をしたのがシェルツアーであった。しかし，彼も刑が半減され，釈放されている。ケルンでは，6－7年の刑に服していることを考えれば，パリの陰謀は一体なんであったのであろう。いずれにしろフランス政府にとっては，やっかいなドイツ人亡命者を処分できる絶好のチャンスであったことは確かである。

フランス政府は，当時パリのドイツ人共産主義者，共産主義同盟の分子だけを標的にしていたわけではない。1850年1月3日の内務省が全国の県に向けて出した手紙には危険な外国人を追放するというもので，各県の県知事から危ない外国人を提出してくれというものであった［A, 3, e, i］。一番恐れていたのは，フランス人と組んだ政府転覆の動きである。パリのドイツ人に目を光らせていたフランス政府は，すでに共産主義同盟の動きを掴む前1849年12月には，バイエルンのパラチナのツヴァイブリュッケン（Zweibruecken）での蜂起に関係したクルマン（Culmann）を調査しているし［A, 1, c］，1851年5月には「人民同盟」（Ligue des peuple）というボンザンファン通りにある社会主義的組織の調査もしている［A, 1, i］。こうしたドイツ人との動きで特に注意していたのが，スイスにおけるフランス人，ドイツ人，イタリア人の謀議活動の連係であった。1850年11月29日のリヨンからの報告では，スイスでは20000人から25000人の秘密結社に属すドイツ人亡命者が，ライン諸地方との関係をもっていると記され，スイスにいる数千人のフランス人亡命者との関係の調査が行われている。フランス政府の懸念は，ジュネーヴ，ヌシャテル，バーゼル，ヴォー（Vaud）地域の亡命者の動きで，彼らがアン県，ジュラ県，ドゥーブ県，上ライン県とつながりを持ち，これが謀議の火種になるということであった。結局，

この問題の解決は，イギリス，アメリカへの追放であるが，問題は逆に各国に秘密結社がまたがることにもなってしまった。特にケルン共産党裁判のフランス側のきっかけは，スイスからイギリスへ渡ったヴィリッヒやシンメルフェニヒなどの人物であったと思われる。1850年2月のブザンソンからの手紙には，「ヴィリッヒはロンドンに亡命したが，スイス，リヨン，ブザンソンとでさえ関係をもっている。彼の見解の多くは共産主義に近い。そのことが彼がヴォー州で得た関心の意味である。彼を徹底的に監視することが重要である」[A, 1, c]。つまり，ヴィリッヒ—シャパーといったバーデン蜂起の重要人物は，フランス政府によってロンドンにおいても厳しく監視されていたのである。

ロンドンの亡命者の中でもうひとつ力をもった組織にルーゲ，キンケル，シュトルーヴェを中心とするマッチーニが始めたヨーロッパ民主主義中央委員会がある。マルクスは，『亡命者偉人伝』[B, 27] で，ルーゲがいかに上手に国際的亡命者組織の一員に納まりえたかを，皮肉な論調で書いているが [B, 27, S. 289 ff]，ルーゲのこの委員会は，ロンドンのドイツ人亡命者と深く関係していたことは確かである。中央委員会は，シャパー，ヴィリッヒの組する委員会とは敵対的であったが，マルクスはこのいずれからもいわば排除された形になっていた。フランス政府は，この委員会にフランスの重要人物ルドリュ・ロランが参加していたこともあって，監視を続けた [A, 1, h]。この組織は，1830年代の青年イタリア同様，各民族別の組織になっており，イタリア人委員会，ポーランド人委員会，ドイツ人中央集権委員会，青年オーストリア人委員会，オランダ人民主中央委員会で形成されていたが，フランスからは，アラゴ(Arago)(1786–53)，デュプラ(Duprat, P.)，ユゴー，ナドー(Nadaud, M.)，キネ(Quinet)(1803–75)，シュー (Sue, E.) (1804–57) などのメンバーが入っていた。フランス政府は，この組織をパリのドイツ人の陰謀とも，またフランス各地にある秘密結社との関連で捉えている。実際には，この中央委員会と，共産主義者同盟はまったく別物であったのだが，フランス政府としては，バーデン蜂起後の亡命者，1849年以後のフランス共和主義者，イタリアの亡命者がすべて協力して何かを画策していると考えていたようである。ロンドン，ニューヨーク，リール，ディジョ

ン，ベルリン，フランクフルト，ジェネーヴ，ブリュッセル，ブラウンシュヴァイクといった通信網があり，パリでは，「各区にクラブの中心が作られ，その代表によって社会主義の革命的政府が形成されており，それは，スイス，ロンドンの亡命者と密接な関係にあった」(1851年11月15日) [A, 1, h]。こうした脈絡故に，フランス政府は，ドイツ人に過敏に反応していたのであった。

2) パリからノルマンディー，ブルターニュへ

パリを追われ，東フランスを追われたドイツ人は，フランス国内では西に進むしかなかった。1849年の命令でドイツ人に割り当てられた地域は，ノルマンディー，ブルターニュであった。パリからドイツ人が移動したコースは，ヴェルサイユ，ウール県，カルヴァドス県，マンシュ県，またヴェルサイユ，ウール・エ・ロワール県，サルト県，イル・エ・ヴィレーヌ県，コート・デュ・ノール県，モルビアン県，メーヌ・エ・ロワール県，ロワール・アトランティック県である。フランス政府が亡命者に提供した地域は，まさにこの地域であった。

i) ヴェルサイユからシェルブールまで

ヴェルサイユのあるセーヌ・エ・オワーズ県は，パリに近いということもあって，ドイツ人亡命者の居住が許可されている地域ではない。1851年の統計ではベルギー人990人，イギリス人562人，スイス人384人で，ドイツ人の351人は4番目である。1851年9月16日の滞在許可証を要求した外国人664人 [A, 3, x] の統計を見ると，多い順にいって，ベルギー人117人，スイス人77人，ドイツ人52人，イギリス人36人で，ほぼ二つの統計は一致している。セーヌ・エ・オワーズ県のドイツ人人口の割合は，比較的高いとも言えるが，この地域で亡命者に関する資料はない。

セーヌ・エ・オワーズ県の西隣エヴルーを中心とするウール県も，ドイツ人人口の少ない県である。1824年の統計ではエヴルー (Evreux) に3人のドイツ人がいる以外は，ほとんどイギリス人である。1851年10月29日の統計でもバーデン人が2人確認されるぐらいである [A, 1, e. ii]。しかし，1851年の統計

では外国人775人のうち161人でイギリス人についで2番目に多い外国人となっている。1849年10月26日には，内務省よりセーヌ・エ・オワーズ県への亡命者の移動を禁止する処置が下されるが [A, 3, e, i]，その命令があるということは，何人かの亡命者がいたということか。

ウール県の西隣りカルヴァドス県のドイツ人の割合はきわめて少ない。1851年の統計では，全外国人1146人のうちイギリス人555人，ベルギー人102人，ポーランド人65人，スペイン人53人，ドイツ人44人の順で，非常に少ない。とりわけ，政治亡命者に関する限り，ポーランド人とスペイン人の多い地区であった [A, 3, c]。カーン (Caen) が亡命者に禁止されていたとしても，この地域でのドイツ人亡命者の軌跡は皆無である。

シェルブール港のあるマンシュ県に関しても，ドイツ人はきわめて少ない。全外国人785人のうちドイツ人はわずか36人にすぎない。多くはイギリスの年金生活者の隠居所となっている地域であった。もちろん，シェルブールがあるのでアメリカへの通過地となった可能性があるが，当時シェルブールからアメリカへ渡るものはほとんどいなかった。したがって，グランジョンがアメリカに渡れないドイツ人たちの状態に関する資料があると書いているが，このことはどういう意味なのか理解しがたい [B, 11, p. 520]。

パリからシェルブールにかけての地域には，ドイツ人が移動した形跡はわずかにすぎない。警察の指導にもかかわらず，この地域に移住するものは実際きわめて少なかったとしか考えようがない。

ii)　シャルトルからブリュターニュまで

シャルトルのあるウール・エ・ロワール県は1851年の統計によると，比較的ドイツ人の割合の高い県である。全外国人509人中120人がドイツ人で，一番多い外国人となっている。しかし，その事実が何を意味するのかを実証する資料はない。スペイン人の亡命者に関する資料は豊富にあるものの [A, 3, f]，ドイツ人亡命者に関してはまったく存在していない。シャルトルはパリから近いこともあって，ドイツ人亡命者がいてもおかしくないのであるが。

となりのサルト県も事情は，同じである。1851年の統計によると，306人の

外国人のうち，ドイツ人は50人でポーランド人85人につぐ人口である。ポーランド人が多いのは政治亡命者が多いせいであるが，1840年代ポーランド人はルマン（Le Mans）を中心として50人前後いたようである［A, 3, w］。1850年代にはポーランド人政治亡命者は25人にまで減少するが，あいかわらずこの地にポーランド人は居住していた。ポーランド人以外にもスペイン，イタリアからの亡命者がいたが，ドイツ人の亡命者に関しては，1840年代も1850年代も記録されていない。

サルト県の西のメーヌ・エ・ロワール県には，1849年以後のドイツ人の痕跡を見ることができる。そこには19人のドイツ人が援助金を受けていることがわかる。バーデン人2人，バイエルン人15人，ヘッセン人1人，プロイセン人1人で，バーデン蜂起に参加したドイツ人たちであると思われる［A, 3, l］。1851年の統計では，432人の外国人の中，ドイツ人は65人でポーランド人，スイス人，イギリス人の次である。人口自体の中に占めるドイツ人の割合は少ないが，バーデン蜂起後のドイツ人が，この県にいたということは，少なくとも西フランスへ移住させるというフランス政府の目的が，達成されていたことを意味している。ただ，彼らが，何の目的でこの地にいたかは，不明である。

ロワール側の河口の都市，ロワール・アトランティック県のナント（Nantes）にもバーデン蜂起に関係した亡命者の痕跡がある。1849年11月4日には，ナント県庁よりナント市長へ，7人のドイツ人政治亡命者がナントに入ってきたことを告げている［A, 4, f］。もっとも彼らは，この地に住むわけではなく，仮の滞在であり，アンジェ（Angers）に向かっている。1851年には，ドゥーブ県から，西へのドイツ人の移住に関して，9人のドイツ人をナントに居住させてくれるようにと要請が来ている。このことを見ても，西側移住政策は，ある程度行われていたようである。もっとも，ロワール・アトランティック県は，1851年の統計では840人の外国人人口のうち78人しかドイツ人が住んでおらず，充分移住策がなされたのかどうかわからない。

とすると，ドイツ人はもっと西に行ったということになるが，どうであろうか。ブリュターニュの中心レンヌのあるイル・エ・ヴィレーヌの外国人人口

658人中（1851年）ドイツ人はわずか14人しかいない。この地域は圧倒的にイギリス人が多く，ポーランド人すら少ないのである。1836年の統計を見ても，イギリス人501人に対し，ドイツ人はわずか4人である［A, 3, j］。イギリス人はほとんどがサン・セルヴァン（St. Servan）に居住し，レンヌ（Rennes）やサンマロ（St-Malo）では外国人人口自体が少ない。1849年以降に関しては，ドイツ人亡命者の痕跡を見つけることはできない。

ブリュターニュの中の，コート・デュ・ノール県，モルビアン県はどうであろうか。1851年の統計ではコート・デュ・ノール県は，全外国人504人中13人（多くはイギリス人），モルビアン県は全外国人175人中7人で，まったくドイツ人の数は少ない。しかし，コート・デュ・ノール県には何人かのドイツ人が送られていることは事実である。1851年1月15日の東フランスのナンシーからの手紙には，サン・ブリユー（Saint Brieuc）へ3人のドイツ人を送ると書いてある［A, 3, d］。しかし，モルビアンの場合はまったく痕跡がない。ただ唯一あるのは，フランクフルトの暗殺事件に絡むものである［A, 3, q］。このフランクフルトの暗殺事件に絡む文書は，各地に配布されている。たとえば，コート・デュ・ノール県［A, 3, d］，ナント市［A, 4, f］，エロー（Herault）県［A, 3, i］，ロワール（Loire）県［A, 3, k］，上ソーヌ県［A, 3, v, i］，などにも同様の文書がある。これを見ても分かるようにけっして西南フランスというわけではない。しかし，西南フランスへこの文書があるということは，フランス政府が彼らが，一日40サンチームの援助をあてにして西南フランスに行く可能性が高いと判断していることを意味している。フランクフルトの暗殺事件は，1848年9月18日，シュトルーヴェの第二次バーデン蜂起の直前に起こった事件であった。フランクフルト議会内の右派であったリヒノフスキー（Lichnowsky）（1814–48）とアウエルスヴァルト（Auerswald, H. A. E.）（1792–1848）が，フランクフルトの蜂起の偵察で暗殺されたのが事件の内容であるが，この事件をめぐって，プロイセン政府は，犯人とされる9名のドイツ人，ブシュヴァイラー（Buschweiler, P.），ゲオルク（Georg, D.），シェーファー（Schaefer, G.），ニスペル（Nispel, A. D.），エシャーリッヒ（Escherlich, G.），メローシュ（Melosch）兄弟，クリスチ

アン (E. Christian), ボルン (Born, P.) がフランスへ亡命した事実を突き止め, 執拗に彼らを追うことにしたわけである。彼らのうち, メローシュ兄弟など6人は, すでに10月ヴェルダンで逮捕されていた。捕まっていないのは残り3人であった。しかし, 最終的に彼らが逮捕されたのか, されなかったのかについては不明である。パリ以西地区におけるドイツ人の実態を見ると, 以上のように当初政府が意図したほど移住した形跡はない。その理由は, マルクスのように, 移住を覚悟するならアメリカ, イギリスへ亡命するものが多かったということであろう。しかし, 実際には多くのドイツ人がこの地域を通った可能性もある。しかし, 定住者がいないということは何を意味するのであろう。おそらくドイツ人亡命者はブレスト (Brest), ナントからアメリカへ渡ったのであろうか。ブレストはルアーヴル, ボルドーに次ぐアメリカへの港であり, ナントにもアメリカ行きの船がなかったわけではないが [A, 1, b], しかし, ドイツ人がブレストやナントから出港したという記録を見つけることはできない。あるいは, ドイツ人は南のヴィエンヌ (Viennes) 県, シャラント (Charente) 県, ジロンド (Gironde) 県へ下ったのであろうか。

3) パリ, リヨンからボルドーへ

ドイツ人亡命者は, フランス政府の意図に反してロワール河周辺や, ブルターニュ, ノルマンディーには, あまり向かわなかったが, パリからポワチエ (Poitiers), アングレーム (Angouleme), ボルドーへ至る道はどうであったろうか。またパリ, リヨン, マルセーユというドイツ人職人の巡歴地のひとつであったリヨン周辺, またマシフ・サントラル (Massif central) の山岳地帯はどうであったのであろう。

i) パリからボルドーまで

1849年に出された, ドイツ人亡命者たちを西に移すと言う文書は, ヴィエンヌ県にも届いている。ただそこには, 7月5日にストラスブールからポワチエに向けて一部のドイツ人が出発したことが記されていて, 確かにバーデン蜂起の亡命者たちがポワチエへ移住するという命令があったことを証明する証拠に

なっている。彼らは，確かにポワチエに到着している。1849年7月にヴィエンヌ県で政府の援助を受けているドイツ人政治亡命者の数は，25人となっている[A, 3, z, ii]。8月4日にコルマールからもドイツ人が移住してきて，全体で32名になっている。しかし，9月以降，少しずつその数は減少していき，12月には22人にまで落ち込んでいる。当時ヴィエンヌ県で支払われた援助金からみると，多くはポーランド人向けであることがわかる。もともと，ヴィエンヌ県は，ポーランド人が多い地域であった。1842年の状況を見ると，ポワチエに住む外国人168人のうち，ポーランド人が65人でかなりの部分を占めていた。ドイツ人は当時は6人しかいなかった[A, 3, z, iii]。1851年の統計によれば，全外国人527人のうち41人がドイツ人であるので，その多くはバーデン蜂起に参加した亡命者であった可能性が高い。

ヴィエンヌ県の南の県シャラント県は，1851年の統計で見る限り，ドイツ人の数は77人とヴィエンヌ県よりも多くなっている。ただ，この県に関する限り，この人口がバーデン蜂起の関係者であることを示す史料はない。もっとも1830年代の史料を見る限り[A, 4, a]，スペイン人亡命者，ポーランド人亡命者，イタリア人亡命者が多く，ドイツ人はまったくいないので，この突然の人口上昇は，ドイツ人亡命者であった可能性は高いと言えよう。

ジロンド県についてはどうであろうか。この地域，特に貿易港ボルドーは昔からドイツ，特にバルト海諸国との交流が深く，ショーペンハウアー（Schopenhauer）（1788-1861），ヘルダーリン（Hoelderlin）（1770-1843）など多くの著名なドイツ人が訪れた都市であった(18)。ボルドーのワインと北方の木材等との交易を行うドイツ人商人はシャルトロン（Chartron）という独得の商人を作りだし，18世紀には常時180人程度の居留人口を保っていた[B, 7, p. 9]。もちろん，ドイツ人の商人の存在は，さまざまなドイツ人職人を引き寄せることにもなり，人口構成の中には当然職人なども含まれることになる。ボルドーのドイツ人は15世紀後半ぐらいにその起源が遡れるようであるが[B, 23, p. 1]，19世紀前半においてもドイツ人は，スペイン人，イギリス人，ポルトガル人と並ぶ主要人口を占めていて，600人の中のある程度は確保していたと思える。ただ，ボルドー地域に

関しては，スペインからの亡命者がこの時代には圧倒的に多く，1832年外国人への援助金の史料を見ても，303人中284人がスペイン人である［A, 3, h, ii］。1845年1—5月のパスポートで見ても，スペイン人が圧倒的に多い。1851年の統計を見ると3693人の外国人のうちスペイン人が1658人でもっとも多く，ドイツ人はポーランド人についで3番目で，373人である。この統計数字を見てもドイツ人の中にどれほど政治亡命者が入り込んでいるのかはわからない。ジロンド県のドイツ人の亡命者に関しては，史料的に充分判明しない部分が多いが，ジロンド県にも，北イタリアの政治亡命者へのアムネスティーに関するラデツキー（Radetzky, J.）(1766-1858）の文書や，パラチナの政治亡命者の帰郷に関するものなどがあり，政治亡命者がいた可能性は高い［A, 3, h, i］。たとえば，バーデン蜂起の参加者のうち，ボルドーへ来たものはギーセン大学教授ヨゼフ・ヒルブラント（Hillebrand）(1788-1871）の息子カール・ヒルブラント（1829-84）である。彼はラーシュタットの牢獄からパリへ脱走し，ハイネの助手をしていたが，1850年ボルドーにやって来ている。やがて彼はフランスで大学教授への道を歩む。政治亡命者の中では破格の出世者のひとりとなる［B, 7, p. 188f］。同じ1850年3月16日には作曲家リヒハルト・ヴァグナー（Wagner）(1813-83）がボルドーを訪れている［B, 7, p, 175］。政治亡命者と言えば，1839年から1840年には，革命家ハロー・ハリンクがボルドーに住んでいた。もっともその当時の彼は画家として認知されていたが［B, 7, p. 180］。そのほか，マルクスとの関係ではこの都市には，マルクスの次女と結婚することになるポール・ラファルグ（Lafargue, P.）(1842-1911）が1851年に9歳でリセに入学するためキューバからやってきている。また，『資本論』をフランス語へ翻訳したロワ（Roy）(1830-1916）もボルドー近郊の出身であった［B, 7, pp. 216-219］。

ボルドーへ至る地域には，ある程度のドイツ人亡命者の名を発見することができたが，しかし，その数もけっして多くはない。これらの地域には，主要な亡命者もあまりいない。ボルドーからアメリカへ渡る人数は，1830年代ほぼ2000人程度であり［A, 1, b］，この中にドイツ人亡命者がいた可能性もあるが，確定はできない。

ii）リヨン周辺

リヨンとドイツ人との関係は深い。まず，スイス，パリ，マルセーユというドイツ人職人の遍歴コースの一つであること，また，スイスに非常に近く，イタリア人亡命者，フランス人亡命者との接点としてこの都市の存在も大きいからである。ジュネーヴから追放された人々は，まずアン県を通ってリヨンに入ることになる。

アン県には，スイスのドイツ人たちに関する史料がいくつかある。たとえば，1842年1月13日警察は，国境の町ゲクスに，ヴァイトリンクがジュネーヴで，義人同盟の機関誌『ドイツ青年の救済の声』を編集していることを報告しているし，1841年12月25日にはヘルマン・デーレケがジュネーヴの印刷所で義人同盟の雑誌『ドイツ青年救済の声』を印刷していることなどを報告している。こうした文書は，フランス人の共産主義者とドイツ人の共産主義者との関係がジュネーヴ，リヨン，パリの間にあるということを警察が探知していることから出てきたものである。このトライアングルは，1848年6月蜂起，その翌年の6月13日の蜂起の時も問題になる。多くの急進主義者や，共和主義者がこのコースを通ってスイスへと入って行くからである。またスイスから追放されてルアーヴルへ向かうドイツ人亡命者のコースともなるからである。1851年にゲクスを通過して，ルアーヴルへ向かうドイツ人に関する史料があるが，これによると計5名のドイツ人がここを通過している［A, 3, a］。したがって，少なくともドイツ人のルアーヴルへのコースの一つであったことは間違いないであろう。1851年の統計によると，アン県には5956人もの外国人がいることになっており，そのほとんどがイタリア人で3486人である。次がスイス人880人で，ドイツ人は146人である。全体の割合ではけっして多くないが，146人という数字自体はけっして少ない数ではない。

リヨンには，ドイツ人の秘密結社がいくつか存在した。そのため，ドイツ人も1830年代からかなりの数いたはずである。1830年代のドイツ人人口は13000人の外国人のうちのある程度を占めていることがわかる。1851年においてもローヌ県の外国人人口14855人のうちドイツ人は968人で全体の比率は低

いものの，かなりの数のドイツ人がいることになっている。1849年には，リヨンに滞在を求めるドイツ人が急激に増えていることがわかる [A, 4, d, ii]。パスポートの請求者から，リヨンの滞在者がどこへ行ったかを調べると，第1位がパリ，第2位がマルセーユであり，国別でみるとスイス，サヴォワが多いことがわかる。すなわち，リヨンは，マルセーユとパリを結ぶ要衝であるということと，スイスとパリを結ぶ要衝であるということをこの史料は証明しているわけである [A, 4, d, ii]。リヨンの史料の中で目を引くのは，エヴァーヴェクに関するものである。エヴァーヴェクが1846年にパリからリヨン，モンペリエ (Montpelier) へのパスポートを取り，ゴーチエ (Gauthier) のところに行くことになっているプルードンに，会いに行くのではないかというものである (1846年11月23日)。このドイツ人共産主義者とフランス人急進派とのつながりは，プロイセンも当時関知していて，ドイツ人仕立て職人との関係があやしいとにらんでいた。そして，リヨンに住んだことのあるマルクヴァルト (Marckwald) なる人物をマークしており，彼らとエヴァーヴェク，仕立屋のA. ベック (Beck) との関係に関心をもっていた [A, 5, a, ii]。当時リヨンにあったドイツ人共産主義同盟は，ほぼ仕立屋によってなりたっており，このあたりとの関係であった可能性はある [A, 5, iii]。エヴァーヴェクとプルードンとの関係はオプマンがすでに指摘しているように，知られていることではあるが [B, 13, pp. 546–561] [B, 14, pp. 78–119]，この出会いについては言及されてはいない。このエヴァーヴェクとプルードンのつながりは，マルクスとプルードンの1846年5月の書簡による決裂の後であり，パリの義人同盟の方が，ブリュッセルの共産主義通信委員会よりプルードンとの関係がうまくいっていたということを意味しているのかもしれない。ただし，この関係も，フランス人，ドイツ人，イタリア人とスイスといった国際的組織との中で考えるべきことであろう。なぜなら，彼はリヨンからスイスへ向かい，モンペリエに行っているようだからである。1849年以後については充分な史料が存在しない。1851年8月に，ドイツ人やポーランド人が特別の許可がないかぎり東の県に向かわないように，またパリに向かわないようにという内務省の命令がローヌ県にも出されているが，こ

れによってリヨンにドイツ人亡命者がいた可能性はあるといえよう。

リヨンから向かう都市の第3位は，サン・テチエンヌ（Saint Etienne）である。サン・テチエンヌは，リヨンの南西にある都市である。フランス最初の鉄道を山沿いに上って行ったところがサン・テチエンヌである。サン・テチエンヌのあるロワール県は，1830年代からドイツ人の多い地区であった。1851年の統計を見ても，1063人の外国人のうち213人がドイツ人で，イタリア人322人につぐ人数である。しかし，この地域でドイツ人亡命者に関する統計的史料は皆無である。残されている史料は，1849年9月28日のシュパイヤー（Speyer）から出されたパラチナへ帰郷するドイツ人に関するものとフランクフルト暗殺事件の文書ぐらいのものである［A, 3, k］。ドイツ人がこれだけいるのであるから，おそらくバーデン蜂起後逃れてきたものもいたと思われるが，その実態は不明である。

アン県，ローヌ県，ロワール県をあわせるとドイツ人は1000人近くである。この数は，西南フランスに比べてかなりの数である。その数が，政治亡命者とどう関係しているか，正確には摑めないが，かなりの数政治亡命者がいたと思われる。

iii）マシフ・サントラルにかけて

サン・テチエンヌを西へ進むとクレルモン・フェラン（Clermond Ferrand）がある。ここはピュ・ド・ドーム（Puy de Dome）山のすぐそばにある都市で，ここから西へ行くと石灰質の高原であるマシフ・サントラルの山々が続く。中央山塊と呼ばれるのはこの地域であり，この時代フランス各地に石職人を出していたのが，この地域であった。石職人の遍歴については，ペルグリエ（Pergulier），ナドーの本から多くの事が分かっているが，最近の19世紀のフランス内部における人口移動の研究の典型的な地域として，研究がもっとも進んでいる地域でもある。(19) したがって，出て行く人口が多く，あえてこの地域に侵入してくる人々は少なかったと言えよう。

ピュ・ド・ドーム県の1851年の外国人人口423人，そのうちドイツ人はわずか32人，もっとも多いのがイタリア人，スペイン人，ポーランド人である。

しかし，このわずかなドイツ人の中に2－3名の政治亡命者がいて，援助を受けているのである[A, 3, s]。ドイツ人亡命者が，サン・テチエンヌより西に行っていたことは，この史料からわかる。

中央山塊になると，各地に残るドイツ人関係の史料はほとんどない。1851年の統計で見る限り，カンタル(Cantal)県は全外国人人口747人のうちドイツ人77人，上ヴィエンヌ県370人中30人，コレーズ(Correze)県209人中17人，クルーズ(Creuze)県291人中52人，ドルドーニュ(Dordogne)県683人中46人，アヴェロン(Aveyron)県335人中24人，ある程度のドイツ人がいることに気付く。またこの地域には，けっして多い数とは言えないが，スペイン人，ポーランド人，イタリア人の政治亡命者も入植していた。これは政治的な意図でもあり，1830年代に入植して行った[B, 40, 17-22]。中央山塊も南部にあるケルシー(Quercy)では，鉄道建設のために1840-50年にかけてドイツ人を含む外国人労働者が多く雇用されていた[B, 40, p. 39]。しかし，彼らがドイツ人政治亡命者であったかははっきりしない。

ドイツ人政治亡命者が，中央山塊の方まで来たことは，おそらく鉄道工事の関係から可能性が高いが，実証はかなり困難である。

4) パリ，リヨンからマルセーユ，アルジェリアへ

マルセーユは，1830年代，リヨンに匹敵する中心の一つであったと言われている。1840年代には，マルセーユにはリヨンと同じく青年ドイツ派のクラブ，ドイツ共産主義者同盟があった。少なくとも，マルセーユはドイツ人亡命者にとって重要な基地であったことは確かである。1845年9月11日の『コンスチツショネル・ヌシャトロワ』(*Constitutionel Nechatlois*)が，青年ドイツクラブはスイス各地にあり，フランスでもストラスブールとマルセーユにあると書いていた[A, 5, a, ii]。したがって，ドイツ人亡命者の流れとして，リヨンから南下し，マルセーユへ向かうと言う流れが考えられるはずである。

リヨンからマルセーユに向かうには，ドローム(Drome)県をとおり，ヴォークルーズ(Vaucluse)県に至る。ドローム県は1851年の統計では，1234人中78

人のドイツ人がおり，ヴォークルーズ県は，1544人中79人のドイツ人がいる。両県ともけっして多い数ではない。ヴォークルーズ県の通過人口，定住人口の統計を見ると，サヴォア人が109人でもっとも多く，スペイン人45人，ポーランド人42人で，ドイツ人は14人である［A, 3, y］。しかし，彼らが政治亡命者であるかどうかは不明である。また，ヴォークルーズの隣のガール（Gard）県にもドイツ人政治亡命者に関する史料は存在しない。ガール県には1851年の統計では111人もいるのであるが，亡命との関係は明確ではない［A, 3, g］。しかし，モンペリエのあるエロー県には，ドイツ人政治亡命者に関する史料がある。たとえば，モンペリエで医学を学びたいという亡命者が数人いる［A, 3, i］。いずれも東のモーゼル，ムルトなどの県からの移動であるが，たんなる命令による移動ではなく，この機会にバーデン蜂起によって失われた就学の機会をモンペリエで取り戻そうと考えている点で注目すべき移動である。政治亡命者の中にはうまく機会を利用することのできた学生もいたのである。もちろん彼らの中にはすでに学位をもっているものもおり，単なる就学ではなく職業を探すためのものであった可能性も大きい。いずれにしろドイツ人政治亡命者がモンペリエまで来たことは確かである。モンペリエより先に関しては，1851年の統計を見ても，ドイツ人の数は少ない。トゥールーズ（Toulouse）に関しても，47人しかいない(20)。このガスコーニュ（Gascogne）地方，ラングドック（Languedoc）地方で一番多い政治亡命者はスペイン人の亡命者である。スペインの政治亡命者は，1823年から1833年の間にフランスに来たものが多い。13000人にのぼるスペイン人がフランスへ逃れてくるが，とくに多くのスペイン人はトゥールーズ近辺の諸県であった［B, 8, p. 22］。

ブーシュ・ドゥ・ローヌ（Bouche du Rhone）県の1851年の統計を見ると，21434人もの外国人がいることになっている。その数はパリのあるセーヌ県60000人につぐ数である。しかし，その大半はイタリアからの亡命者や労働者であり，その数は17624人である。ドイツ人は，425人で，かなり少数である。ドイツ人亡命者がマルセーユに来る理由は，アルジェリアへ行くことしか考えられないが，そうしたドイツ人に関する史料はまったく見あたらないのであ

る。その理由は，アルジェリアへ行く亡命者に関しては各県に，マルセーユではなくツーロン（Toulon）港へ行くように指示されていたからかもしれない。そこにはもしマルセーユに行けば乗る船が少ないであろうという注意書きが掲げられてもいたから，なおさらマルセーユへ向かうものはなかったかもしれない（1848年12月8日［A, 3, e, i］）。1849年5月12日には，ツーロン地区の滞在は外国人亡命者に禁止されている。アルジェリアの外人部隊へのドイツ人亡命者の派遣は，西フランスへの移動とほぼ同じ時期に考えられていた［B, 28, Jg. 13, S. 374］。アルジェリアの外人部隊の集合地はナンシーで，そこで徴兵が行われていた［B, 28, Jg. 13, S. 375］。1845年のナンシーから出されたパスポートの行き先を見ると，アルジェリアが，北アメリカ299人につぐ293人で，約半数がアルジェリアへ向かっているのである［A, 3, o］。しかし，1847年まで半数を占めていたアルジェリア行きが，1848年には10%強へ激減している。1849年はこれが10%以下に減っているのである。したがって，アルジェリアの外人部隊(21)へドイツ人が派遣されたのかどうか統計的には充分証明できない。アルジェリアに向かったドイツ人は，すべてマルセーユやツーロンから出発したわけではない。ルアーヴルまで来て，アメリカへ渡る資金が尽きたもののなかには，アルジェリアへ渡るものがいたからである。アルジェリアへ入植したドイツ人たちは1855年までに10000人にも上っていた［B, 21, p. 23］。

南フランスにおけるドイツ人たちについて言えることは，比較的少ないということである。アルジェリアの外人部隊や，医学生を除けば，あまりいないといってもよいであろう。本来この地域にはイタリア人や，スペイン人の政治亡命者が多く，ドイツ人にとって都合の良い場所ではなかったということであろう。マルセーユのドイツ人秘密結社もすでにこの当時は力を失っていたと言える。

小　括

1848年革命の結果，フランスにおけるドイツ人は，結局激減することになる。革命前はヨーロッパでもっとも多くドイツ人をかかえ，さらにその活動の

急進性でも群を抜いていたフランスが，革命によるドイツへの帰還，その敗北によるイギリス，アメリカへの亡命によって，フランスでは，ドイツ人の数自体の減少と，急進的な活動家の消滅が生じ，フランス的革命論や，フランス的社会主義自体が，もはやドイツ人の魅力を捉えることはなくなる。

1848年革命でもっとも主体的な活躍をしたものは，3月の最初の革命は別として，革命後ドイツに帰った亡命者であったと思われる。その思想，その国際的連絡網，その過激さ，いずれにおいても，亡命者を抜きに語ることはできない問題である。ドイツで革命が失敗したのは，ブルジョアの弱さが原因であるという通説があるが，そもそもブルジョアに革命への意志がどれほどあったか自体が疑問であろう。バーデン蜂起の最後の激戦地ラーシュタットは民主主義の聖地とされているが，その蜂起の主体は，あくまでもスイス，フランスからきた亡命者たちで，ブルジョア自身の主体性がどこまであったのか，多いに疑問であるということになれば，一体1848年革命とは何であったのであろう。おそらく，1年半にわたる革命以後の構造的な改革において，その中心をなしていたのは，亡命者を中心とする職人，学生などの力であり，そのアジテーションであった可能性が高い。フランスの臨時政府自身，ドイツ人亡命者を唆し，ドイツへの革命の波及を戦略としたことも事実である。結局，1840年代の急進的な亡命者たちだけでなく，彼らの声に触発された多くのものも，亡命の道を選ばざるをえなくなるのである。

ただ革命前と違っていたことは，亡命すべき国は，スイスやフランスではなく，イギリス，アメリカであったことは革命をより過去のものとしてしまうことになったと思われる。その後，こうした革命を亡命者が輸出する可能性はなくなるが，それと同時に，優柔不断とされるブルジョアは，革命を経ることなく革命に匹敵する構造変革を行うことになるし，未発達とされた労働者自身も労働者組織の平和的な展開を望むようになる。もともと，革命前のフランスのドイツ人亡命者たちでさえ，革命直前の時期になると革命的冒険主義よりも，労働者救済の団体へと傾きかけていたのであったが，2月革命と連鎖的に生じた3月革命という偶然のできごとによって，再び革命的冒険主義に変わってし

まったという問題があった。とすれば，革命とは一体なんであったのか，また何を生み出したのか，冷静に考えていかねばならない問題であろう。フランスにわずかに残ったドイツ人亡命者たちも，結局パリや東フランスから西南フランスへ移住させられ，その過激さを失い，革命の輸出どころか，イギリスやアメリカの急進派との連絡すらできなくなる。もはや，悪しき革命，社会主義，共和制などの急進的思想を持ち運ぶ媒体である亡命者は，大陸から消滅することになるのである。

注

（1） 革命崩壊後，政治亡命者以外にも多くのドイツ人がアメリカへ移民した。その数はバーデンですら8万人，人口のほぼ一割が国を去ったことになる（*Leipziger Illustrierten Zeitung*, 1850）[B, 3, S. 407]。

（2） ドイツ人軍団がバーデンへ乗り込む頃になると，軍団の数は激減し500人ぐらいになる。おそらく，意気込んで参加したパリの職人たちの中には，暴力沙汰に巻き込まれることを避けたものも大勢いたようである。

（3） アムステルダムの社会史国際研究所には，ヴィリッヒコレクションがある。所蔵されている史料はブザンソンのコロニーの名簿，フイリップ・ベッカーへの手紙，プファルツ，バーデンの帝国憲法キャンペーンに関するものである [A, 7]。

（4） アムステルダムのヴィリッヒに関する史料は，すでに，オバーマンによって使用されている [B, 30]。彼はその中で，職業別，出身別に名簿を分析し，詳しい数字をあげている。

（5） ストラスブールを含め，フランスの国境地域には何人かのドイツ人が居住していた。カールスルーエ [A, 5, c] の史料によれば，1848年—1849年5月まで52人が調査，報告されている。しかし彼らは西へ移動させられた可能性が高い。

（6） この史料には，ストラスブール周辺に滞在したドイツ人亡命者44名が，掲載されているが，別の史料ではラヴォーはサルディニアの港からイギリスへ向かうパスをもっているとも書かれてある [A, 5, c]。

（7） 1974年の6月26日ラーシュタットの博物館の開会の際，当時西ドイツの大統領だったグスターフ・ハイネマンは，ラーシュタットでの民主主義の抵抗を高く評価している [B, 9, S. 7 ff]。1945年から始まる西ドイツの民主主義の萌芽をここに求めようとする視点であるが，その後バーデン蜂起の研究が増えてきていることはそうした傾向の現れであろう [B, 32]。

（8） ラーシュタット占領後開かれた裁判で，20人の死刑が確定し，そのうち19人が処刑された。減刑され，アメリカへ亡命することになるのが，コルヴィンである。

最初の処刑は8月7日で，処刑されたのはラーシュタットで新聞（*Festungsbote*）を発行していたエルゼンハウス（Elsenhaus, E.）（1815–49）であった。処刑は10月20日まで続けられたが，現在ラーシュタットの町に，その記念碑がある［B, 9, SS. 30–35］。

（9）警察の捜査を調査したルーピーパーによると，1848年—1853年のドイツの政治亡命者のうちもっとも多いのがプロイセン出身で，バーデン，ヴュルテンベルクがその次に来ているが［B, 37, S, 344］，これはあくまでも警察の調査であり，警察力の強いベルリンが中心にならざるをえない。その職業的内訳でも，織布工やタバコ労働者が多くなっているが［B, 37, S. 349］，これも当然ベルリンを中心としたものであったと思われる。なぜなら，こうした職種は，スイスに亡命した人々の主要な職種ではないからである。

（10）バーデン蜂起に関するアルヒーフの史料は，ドイツではカールスルーエ［A, 5, c］，メルセブルク［A, 5, a, i］，ヴィースバーデン［A, 5, d］，ドレスデン［A, 5, b］などにあるが，これらについて筆者は一応調査はしたが，まだウィーン，フランクフルト，ダルムシュタットなどいくつかは調査をしていないところがあるので，史料的に重要なものが抜け落ちているかもしれない。

（11）1849年7月16日出された追放令は，次のようであった。「1）ラインバイエルン，バーデン大公国の新しい蜂起に参加した政治・軍事指導者，そのほかの主要な指導者で，スイスにやってきたものは，すぐにスイス領内から追放される。2）a）それに該当するのは，暫定政府，その他の参加者であるもの，たとえば，ツィーツ（Ziz），ブレンターノ，シュトルーヴェ，ゲグ，ヴェルナー（Werner），フィクラー。b）軍事的指導者，たとえばミエロスラフスキー，ジーゲル，ドル，メルゼイ，ブレンカー（Blenker），ヴィリッヒ，メッテルニヒ。c）蜂起した政府や軍で高い，影響力のある地位にいたその他の人々。その名についてはやがてスイス連邦議会に知らせられるであろう。3）さらにスイス領から15日の回覧状で述べられている，ハインツェン，ネフ（Neff, Fr.），レーヴェンフェルス，ティールマン（Thielmann, G.）や，1848年9月のバーデン蜂起に参加したものすべて」［B, 20, S. 54］

（12）オバーマンもこの史料をすでに使っている［B, 30, S. 143］。

（13）カールスルーエの史料は，「1849年から1853年6月までスイスからバーゼル，フランスを通ってイギリス，アメリカなどへ向かったバーデンの亡命者のリスト」で，約350人くらいのものである［A, 5, c］。ドレスデンの場合，主要人物だけのもので1919名の名前，その滞在先が載せられている［A, 5, b］。ブリュッセルの史料［A, 8］の場合，52人の名前があげられている。しかし，もっとも重要な史料はベルンの国立アルヒーフの史料であろう。この史料には1849年9月から1850年8月までの多くの人々の記録が載っている［A, 6, a］［A, 6, b］［A, 6, c］。

(14)　現在出版されているドイツ人の移民者のリスト［B, 10］は，1850年から始まっているので，1849年に関しては，それを使って調べることはできない。

(15)　オーステンデ市役所のアルシーヴには，渡航記録はない。1940年5月27―28日の空襲でアルシーヴは全焼したということである（オーステンデ市役所のHostyn氏の1993年2月21日付け筆者宛の私信)。しかし，イギリス側のロンドンのパブリック・レコード・オフィスには，渡航記録が残されている。残念ながら筆者はまだこの史料を調査していない。

(16)　革命前にはバーゼル―ストラスブール間の鉄道は開通していたが，パリまでは開通していなかった。しかし，1849年7月21日に開通することによって，ルアーヴルまでバーゼルから鉄道で行くことが可能となる（バーゼル―ラングル間はまだ開通していない)。もちろん9月15日には，リヨン―パリ間も開通するので，ブザンソン経由も大幅に短縮される。ただブザンソンとディジョン間がまだ開通しておらず，かなり日数がかかったと思われる。

(17)　ドイツの統一的警察制度の発展は，1851年に始まる。1851年，ベルリン警察のヒンケルダイ（Hinkeldey）のイニシアチヴで，ウィーンのヴァイス（Weis)，ハーノファーのヴェルムート（Wermuth)，ザクセンのエバーハルト（Eberhardt）が，会合し，革命家たちの監視について協議する［B, 37, S. 338］。ケルン共産党事件は，ちょうどこの頃起きたものであった。

(18)　最近，ボルドーのドイツ人に関しては関心が高まっているようである。ここ数年だけで，エスパーニュの作品［B, 7］（これについては，［B, 48］参照）だけでなく，ヘルダーリンに関しアメット［B, 1］，ルフェーヴルの翻訳［B, 22］，ショーペンハウアーに関し翻訳［B, 38］と研究書［B, 36］が出版された。

(19)　この地域は，フランスにおけるフランス人の移動に関する研究のメッカである。リムーザン地方の石工の移動についてはコルバンの研究［B, 4］があるし，パリにおける彼らのコロニーについてもレゾン-ジュールドの研究がある［B, 31］。1840年代のフランスにおけるフランス人の人口移動については，ホーヘンバーグ［B, 16］の研究がある。

(20)　トゥールーズにはドイツ人亡命者に関する史料はまったくない（1993年7月22日アルシーヴのAnnie Charnay氏の筆者宛の私信)。

(21)　アルジェの国立アルシーヴには，ドイツ人軍団に関するものは一切ないということである（1993年10月5日アルシーヴのAmmour氏の筆者宛の私信)。

引用文献（引用はすべて文献番号による。例［A, 1, a］はアルヒーフ史料(1)のaを指す。）

A.　アルヒーフ史料

(1)　Archives nationales

a.　F⁷ 12183A Préfecture de Police

b. F^7 12377
c. BB^{18} 1481　8191 a
d. BB^{18} 1488　9303a
e. BB^{24} 405–8　S. 52 N° 2667
f. BB^{24} 419–430　D^n, No 1420
g. BB^{18} 1796
h. BB^{30} 394 L'Affaire du complot allemand, Oct. -Dec. 1851
i. BB^{30} 392^2　p. 169
j. BB^{30} 406

(2) Archives des ministères des affaires étrangers
Mémoires et documents. Allemagne 130

(3) Archives départmentales
a. Ain, Bourg en Bresse
10M3 Réfugiés expulsés de Suisse. 1831–57.
b. Doubs, Besançon
M842 Réfugiés allemands 1848–1851
c. Calvados, Caen
M3107 Refugiés et étrangers, subventions et subsides, plaintes 1844–48.
d. Côtes du Nord, St. Brieuc
4M204 Réfugiés allemands 1848–51
e. Eure, Evreux
i. 4M211 Circulaires et instructions 1841–67.
ii. 4M219 Rapports des Sous-Préfets, 1824
f. Eure et Loir, Chartres
4M224 Etrangers-Surveillance A IX-1824
g. Gard, Nimes
4M391 Circulaires, réglements, l'accueil des réfugiés politiques
h. Gironde, Bordeaux
i. 4M478 Réfugiés politiques étrangers ; instructions, circulations 1843—1853.
ii. 4M673 Enregistrement des visas des passeports étrangers 1845–70
i. Herault, Montpellier
39M116.
j. Ille et Villaine, Renne
4M290 Contrôle et expulsions des étrangers, 1835–51
k. Loire, St. Etienne
15M3 Réfugiés allemands, 1849

l. Maine et Loire, Angers
32M1 Etats nominatif des allemands réfugiés subventionnés qui s'y trouvent en residence au 1849.
m. Marne, Chalon sur Marne
57M14
n. Haute Marne, Chaumont
84M6
o. Meurthe et Moselle, Nancy
4M233 Passeports
p. Meuse, Bar-le-Duc
M131 Réfugiés allemands 1833–1838, 1848–
q. Morbihan, Vanne
M2212 Refugiés étrangers 1839–1877
r. Moselle, Metz
78M 1bis Réfugiés allemands 1852
s. Puy de Dome, Clermont Ferrand
M0274 Piéces comptables et correspondance 1848—56
t. Haut Rhin, Colmar
i. 4M173 Réfugiés Allemands 1819–48
ii. 4M202 Relations franco-allemandes nouvelles d' Allemagne, 1803–70
u. Bas Rhin, Strasbourg
i. IIIM423 Etats nominatifs de réfugiés allemands arrivés dans le Bas Rhin 1848–50
ii. IIIM415 Réfugiés politiques. Circulaires et Instructions 1845–51
v. Haute Saône, Vesoul
i. 29M1 Police générale et administrative, réfugiés Allemands, Italiens, Piemontais 1834–59
ii. 29M4 Police générale et administrative, réfugiés polonais et autres
w. Sarthe, Le Mans
M87/bis Refugiés politiques en résidence dans le départment 1833–1851
x. Seine et Oise, Versailles
5M1 Etrangers 1843–1898
y. Vaucluse, Avignon
4M127 Contrôle nominatif des étrangers en residence 1851 sept-déc.
z. Vienne, Poitiers
i. 4M177 Circulaires, correspondance, contrôles concernant les réfugiés itali-

ens (1848-52), allemands (1848-52) et les désserteurs de légion anglais au service de l'Espagne (1836-38)

ii. 4M182 Paiement des subsides aux réfugiés allemands, espagnols, italiens, polonais et portugais.

iii. 4M188 Etats mensuels du mouvement des étrangers dans le départment et dans les arrondissements 1825-42.

(4) Archives municipales

a. Angoulême

I46 Refugiés étrangers

b. Boulogne

Débarquements. Période 01/08/1849 au 31/08/1850

c. Hagueneau

Ia 20

d. Lyon

i. I^2 144 Passeports 1844-49

ii. I^2 149 Police des étrangers, 1789-1870

e. Metz

I^2 No. 85 Police général, Réfugiés, Bavarois et Prussiens

f. Nantes

I^2 c49d4 Police générale, Réfugiés allemands, 1848-51.

(5) Deutschland

a. Merseburg, Geheimes Staatsarchiv

i. 2. 4. 1, Abt. I, Nr.8282 Massnahmen gegen die in die Schweiz geflüchteten Teilnahmen an der Revolution in Baden und der Rheinpfalz

ii. Rep. 500, Nr. 10, 5

iii. Rep. 77, Tit. 500, ad. 10

b. Dresden, Staatsarchiv

MdI, Nr. 23. Die Konferenz in München betr: Polizei Sachsen fol. 43 no1.

c. Karlsruhe, Generallandesarchiv

Abt. 49, 1469 Massregeln gegen die politischen Flüchtlinge in Frankreich und in der Schweiz

d. Wiesbaden, Hessisches Hauptstaatsarchiv

Abt./Nr. 5, 264, B16-13.

(6) Bern, Bundesarchiv

a. 21/82 Flüchtlingen, u. a., Liste "Le Havre", refugiés allemands passés au Havre

b. 21/220 Verzeichnis der ausgewiesenen Flüchtlinge, 1848–1855
c. 21/253 Verzeichnis über sämtliche Flüchtlinge, welche von der eidegenössischen Polizei in Basel weiter instradiert wurden, Juli 1849.
(7) Amsterdam, International Institute of Social History
Willich Collection, General Liste der Mitglieder der Kolonie in Besançon
(8) Bruxelles, Archives générales du royaume
160, Police des étrangers. Dossiers généraux. 247–249
(9) Tokyo, Center for historical social science litterature, Hitotsubashi Univ.
A-B248 Collection of 123 posters, leaflets and small journals of the 1848 Revolution in France.

B. 文献史料

(1) Amette, J.-P., *L'Adieu à la raison, le voyage de Hölderlin en France* , Paris, 1991.

(2) Bittel, K., *Der Kommunistenprozess zu Köln 1852 im Spiegel der zeitgenössischen Presse* , Berlin, 1955.

(3) Bundesarchiv hrsg., *Erinnerungsstätte für die Freiheitsbewegungen in der deutschen Geschichte, Katalog der ständiger Aufstellung*, 1984.

(4) Corbin, A., Migrations temporaires et société rurale au XIXe siècle : le cas du Limousin, *Revue historique*, 500, 1971.

(5) Dlubek, J. R., Ein deutscher Revolutiongeneral. Johann Philipp Becker in der Reichsverfassungskampagne, *Jahrbuch für Geschichte* , 1972.

(6) Engels, Fr., Die deutsche Reichsverfassungs-Campagne, *MEW*. Bd. 7, (邦訳『ドイツ国憲法戦役』大月書店)

(7) Espagne, M., *Bordeuax baltique, la présence culuturelle allemande à Bordeaux aux XVIII^e et XIX^e siècles*, Paris, 1991.

(8) *Exil politique et migrations économique. Espagnols et Français aux XIX^e-XX^e siècles*, Paris, 1991.

(9) *Freiheitsbewegungen in der deutschen Geschichte, Handreichung zum Besuch der Erinnerungsstätte*, Karlsruhe, 1990.

(10) Glazier, I. G., Filby, P. W., Germans to America, lists of passengers arriving at U. S. Ports, 1950–1855, Vol. 1–9, Wilmington, 1988–1989

(11) Grandjonc, J., Etats sommaires des dépôts d'archives françaises sur le mouvement ouvrier et les émigrés allemands de 1830 à 1851/52, *Archiv für Sozialgeschichte* , XII, 1972.

(12) Greyerz, H., Franz Raveaux in den Jahren 1848 bis 1851, Näf, W., hrsg., *Deutschland und Schweiz in ihren kulturellen und politischen Beziehungen*

während der ersten Hälfte des 19. Jhrds., Bern, 1936.
(13) Haubtmann, P., *Proudhon, sa vie et sa pensée*, Paris., 1982.
(14) Haubtmann, P., *Proudhon, Marx et la pensée allemande*, Strasbourg, 1981.
(15) Hervé G., Emile Küss, La Journée du 14 juin 1849 à Strasbourg, *Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaften des Ackerbaus und der Künste im Unter-Elsaß*, XLVIII, XLIX, 1914.
(16) Hohenberg, P., Les Migrations dans la France rurale (1836–1901), *Annales E. S. C.*, No. 2, 1974.
(17) Igersheim, F., *Politique et administration dans le Bas-Rhin (1848–1870)*, Strasbourg, 1993.
(18) Jurg, F., *Die Schweizerische Flüchtlingspolitik nach der Revolution von 1848 und 1849* , Diss., Zürich, 1977.
(19) Kliem, M., hrsg., *Karl Marx, Dokumente seines Lebens*, Leipzig, 1970.
(20) Langhard, J., *Die politische Polizei der Schweizerischen Eidgenossenschaft* , Bern, 1909.
(21) Lardillier, A., *Le Peuplement français en Algérie de 1830 à 1900*, Versailles, 1992.
(22) Lefebvre, J.-P., *Hölderlin, journal de Bordeaux*, Paris, 1990.
(23) Leroux, A., *La Colonne germanique de Bordeaux* , Bordeaux, 1918.
(24) Leuillot, P. Le 13 Juin 1849 à Colmar et dans le Haut-Rhin et le procés de Besançon (Novembre 1849), d'après le "Comte-Rendu des assises" du Doubs, *Annuaire de la Société historique et littéraire de Colmar*, X, 1960.
(25) Leuillot, P., La Société republicaine de Colmar en 1848, *Annuaire de la Société historique et littéraire de Colmar*, XIV, 1964.
(26) Marx, K., Enthüllungen über der Kommunisten-Prozess zu Köln, *MEW*. Bd. 8,（邦訳『ケルン共産党裁判の真相』大月書店）
(27) Marx, K., Die Grossen Männer der Exiles, *MEW* Bd. 8,（邦訳『亡命者偉人伝』大月書店）
(28) Melzer, I., Pfälzische Emigranten Frankreich 1848/49, *Francia* , 12, 13, 1984. 1985.
(29) Neitzke, P., *Die deutsche politischen Flüchtlinge in der Schweiz 1848–49*, Diss., Kiel, 1926.
(30) Obermann, Zussamensetzung einiger Freischaren in der Revolution von 1848/49, *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, IV, Berlin, 1973.
(31) Raison-Jourde, F., *La Colonne Auvergnate de Paris au XIX*^{e} *siècle*, Paris, 1976.

(32) Real, W., *Die Revolution in Baden 1848/49* , Stuttgart, Bern, Köln, Mainz, 1983.

(33) Reiter, H., *Politisches Asyl im 19 Jahrhundert*, Berlin, 1992.

(34) *Revolutionsbriefe. 1848/49* , Leipzig, 1973.

(35) Rude, G., Les Refugiés allemands à Besançon sous la deuxiéme République, *Bulletin de la société d'Histoire de la Révolution de 1848*, No. 35, Paris, 1939–40.

(36) Ruiz, A., Johanna et Arthur Schopenhauer d'un souvenir d'un voyage à Bordeaux en 1804, 1992.

(37) Rupieper, H.-J., Die Polizei und die Fahndungen anläßlich der deutschen Revolution von 1848/49, *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, Bd.64, Heft 3, Wiesbaden, 1977.

(38) Schopenhauer, A., *Journal de voyage*, 1988.

(39) Struve, G., *Geschichte der drei Volkserhebungen in Baden*, Bern, 1849. (Reprint, Leipzig, 1977).

(40) Toujas-Pinèdez, Ch., *L'Immigration étrangére en Quercy aux XIX^{e} et XIX^{e} siècles*, Toulouse, 1990.

(41) Zucker, A. F. ed., *The Forty-eighters*, New York, 1950.
(邦訳『アメリカへ渡った三月革命人　人名辞典』石塚正英訳，『社会思想史の窓』No. 24-, 1986年—)

(42) 拙稿「1840年代におけるドイツ人人口の動態 (1) 東フランスについて」『東京造形大学雑誌』6A，1990年

(43) 拙稿「1840年代におけるドイツ人人口の動態 (2) 特にパリのドイツ人に関して(上)」『商経論叢』27巻3号，1992年

(44) 拙稿「1840年代におけるドイツ人人口の動態 (3) 西南フランスについて (上) フランス経由でスイスを追放されたドイツ人のルート」『商経論叢』28巻3号，1993年

(45) 拙稿「1840年代におけるドイツ人人口の動態 (3) 西南フランスについて (中) ルアーヴル経由でアメリカへ渡ったドイツ人」『商経論叢』28巻4号，1993年

(46) 拙稿「マルクスのブリュッセルからのパリへの追放—2月革命とマルクス」『経済貿易研究』No. 19, 1992年

(47) 拙稿「マルクスのパリからの追放—独，仏，ベルギー関係から見た場合」『経済貿易研究』No. 18，1993年

(48) 拙稿「書評『M. Espagne, *Bordeaux baltique, La Presence culuturelle allemande à Bordeaux aux XVIII^{e} et XIX^{e} siècles*』」『日本18世紀学会年報』，1993年

(本稿は，1987年度文部省科学研究費奨励研究A，1993年度一般研究C，1989年度，1990年度東京造形大学研究費C，1991年度，1993年度神奈川大学海外出張の成果の一部である)